

平成二十四年・二十五年に、生誕百年となった今は亡き父・正一と母・クニに捧ぐ。

父の舟

タカハシ
ユキオ

もくじ

父の舟 ● 一

婆の店つこ ● 一七

野犬 ● 三五

稲妻 ● 四五

お齒黒 ● 五一

骨箱 ● 五七

押入 ● 六七

三角ベースボール ● 七三

雪に眠る ● 七九

銀杏 ● 八七

葬送 ● 九七

島影 ● 一一一

父の舟

朝靄を切り裂くように、父が竿を差す。

父の舟が川上に触先（へさき）を向けた。蓑（みの）を着た父、竿をたぐる手から水が滴り落ちる。朝草刈りした束が舟の真ん中に数束、川面を擦り、浸るように横積みされている。青い露草も混じる。川面に水スマシのような水痕をつくりすべる。露草の向う、触先ではしつかり両側の舟縁（ふなべり）に掴（つか）まり、靄の先を懸命に見入る私がいる。それはまだ幼い時分の私の姿、たった。

流れが速い川の中ほどまで来ると、父は竿を舟底に倒し、滑らせ置く。今度は櫂（かい）を取り出す。舟尾の横板に腰掛け、露草越しに触先を見やりながら、ゆるやかに左手に弧を描くように櫂を掻く。弧の頂点に達すると流れに乗りながら、その触先は徐々に向う岸に方角をずらす。川を覆う靄がしだいに切れ、薄まり始める。靄の切れ間、流れゆく水面上に向う岸が見え隠れする。

その緑の岸に一つの影を見つけた。触先の私が思わず、

「母ちゃん」

と叫ぶ。滴るような緑の岸、青い山並みが背景をつくる。しだいに野良着姿の母が大きくなる。

母は両手に風呂敷とやかんを提げて立っている。川下に流されすぎぬよう、父は注意深く舟着き場の位置を見定め、その岸に触先を近づける。舟底から抜き出した竿を、空を切り持ち上げ、川底に思いつき差し込み、ブレーキをかけるように舟を岸に着ける。母がその触先を掴み、引っ張り込み、押さえる。その間に父は岸に飛び降り、触先にある碇（いかり）を持ち上げ、岸辺に

放り投げる。舟は舳先を川上に向け、吹き流しの鯉のぼりのように繫留(けいりゆう)される。

「随分待ったが」

父の言葉に母が、

「いや、今し方来たばかりだ」

「そうが、ちよつと霧が深くて、舟つこ出せねがと思つたよ。もういいのが」

父は再び舟に乗り込み、朝草の束を岸辺に放り投るよう降ろす。朝草の匂いが岸辺に漂う。

降ろし終えると、先にやかんと風呂敷包みを受け取つた。それから、母をいたわるように手を差し伸べ、引き寄せ、舟に乗せた。なぜか、父と母はしばらく離れて暮らしていたかのように初々しい素振りを見せた。今朝方まで一緒だったのにと、私は不思議がった。

父は岸上がり、朝草の束を担ぎ土手の上まで往復して運ぶ。土手の上にはリヤカーが置かれている。朝草は家で飼っている馬のカルハナの干し草にするものだ。家畜を飼う家では、どこでもこうして朝草を刈る。運び終えると「どっこいしょ」と、草むらに腰を落とし、胸ポケットから煙草を取り出し一服し始める。私と母は舟の真ん中に並び腰掛けた。もう、母が拵(こしら)えてきた昼の弁当が気になっている。待ちきれず母におかずを何だと聞く。

「卵焼きだ」

との返事に、

「うわー、ほんとは」

と私は舞い上がりそうになった。姉のトシコに滋養をつけさせようとして飼っている鶏の、貴重な卵なのだ。私を喜ばせたかと思うと、母はすかさず、

「本当は、同じ色したたくわんだ」

と言つてのけた。母に一杯食わされ、私はへこんだ。少しがっかりしたが、それでも嬉しかった。こうして父と母と一緒に舟に乗り、川向こうの畑に行けることが。そこへ弁当を持って、父と母が汗して働く野良で、その二人の姿を見ながら、一日中好きな事をして過ごしていられることが、私には無性に楽しい事であった。

頭上から、しきりにヒバリのさえずりもしている。一服を済ませると、父は母の鍬(くわ)を舟に積み込み、碇を舳先に戻し、また船尾に乗り移った。父の漕ぐ舟は、母を乗せ岸を離れ、また川を渡る。朝方からの靄も晴れ、おだやかに澄み切った空の下、男山が真正面に見える川上に向けて、父は竿を差す。同じように川の中ほどに來ると、流れにまかせ、ゆるやかに弧を描くように櫂を操つり、向こう岸へ舳先を向ける。

流れの速い難所を越えた頃、母は父の方を振り向いて、

「随分遅くなつて悪がつたな」

と変なことを言つた。父は、

「なあーに、お前も少しは楽しい思いができただろう」

と返答した。母は私に内緒で、いつ、誰と一人楽しい思いをしたのかと、母の横顔を覗いた。

母は、黄色い宵待ち草が点々とする葦の繁る岸辺の青々とした茂みを眺めながら、

「少しはな。でも、こんなに遅くなるとは思ってもみながったな」

しきりに母は、父に遅くなったことを詫びているかのようだ。日焼けした父の額に川面から照り返しが映る。見るからに父は嬉しそうな顔をしている。それが幼い私にも分った。

やがて、ヒタヒタと川面が揺れる、まあるい玉石の浅瀬をすべり抜ける。底には川魚の影も泳ぐ。母は父に聞く。

「トシコはどうしている」

変な話をするものだと、私は自分の耳を疑った。だってトシちゃんは家にいる。今朝、だって私に、「ユキオ、弁当食うの待ち遠しいだろう」と言い、母より先に出掛けた私と父を見送つてくれもした。

「ああ、幸せそうだ」

母は父の返答を聞いて、何度もうなずき、安堵しているふうで、

「そうが、よがったな。そうが」

とかすかな言葉を漏らした。そんな母に私は文句を投げつけた。

「トシちゃん、家にいる。どこさも行ってなんかいなぞ」

母は私の文句を聞きながら、ただ、にこやかな顔をするだけだった。川風が優しく通り抜けて

いく。

またまた、おかしいことを母は父に聞いた。

「何も不自由なことないだらな。それとも、誰か世話してくれるヒトでもできたのが」

父は即座に、

「バガ！ そんなことはない。一人でやれているさ」

何だか言葉尻を曖昧にした。父は都合が悪くなると、決まって「馬鹿」と言う。それを取り繕うかのように、父が逆に聞き返す。

「シゲルたちは、しっかりとやっているのが」

シゲルとは私の一番上の兄の名前である。

「うーん、シゲルもだけど、その下の者たちがしっかりしないでな。シゲハルには会ったべ」

「んにゃ、エイゴには会ったが、シゲハルの話は聞いてねえな。どうした」

父の問いかけに、母は答えたくなきさそうに、川面を見下ろし、水を手ですくいながら、

「もう、この川を渡ってしまったじゃ。エイゴさんより、一足先な」

シゲハルは私の二番目の兄である。そしてエイゴとは、父の弟である。何やら、父と母は亡くなった人の話でもしているかのようだ。母が続けて、

「マサユキもさっぱりダメでな。みんな誰に似てしまったのがな」

母は、皆、父に似たのだと言いたげそうだ。

「見送ってくれたのは、ツヤとミツコ、そしてユキオだけだった。今頃、兄弟喧嘩している頃だべ」

兄弟喧嘩、その言葉に私は驚いた。脇の母のモンペをしきりに引つ張り、
「俺、ここにいるぞ。兄弟喧嘩なんかしていない。みんな仲いいだろう」

と言ってみたが、もう、母は父と次の話をしていた。父は煙草をくわえて、

「それじゃ、親戚の人たち、部落の人たちはどうした」

「私が最後になってしまった。父ちゃんの迎えがあんまり遅いものだから。ずっと、とじえっこだった」

母は意外にも寂しかったと、父に伝えた。

「それは、悪いことしてしまったな」

父は背後から、母に詫びの言葉を投げ掛けた。煙草の匂いが川下の二人に届く。

鳶がピーヒョロ口とひと鳴きし、舟の上を旋回した。やがて岸辺が近づく。三人を乗せた舟は、葦で覆われた砂地の入り江に乗り上げ、父は碇をさくつと放り降ろした。

黄色い昼顔が咲き乱れる。葦が行く先に両側から覆い被さる。畑への小径を親子して歩く。舟着き場から畑までは、かなりの距離がある。それも畑の端や萱のトンネルだったりする。とても小さい私一人では、迷い込みそうな獣みちのくねくね径だ。

川向かいの畑での楽しみが私にはあった。

「カゴ、食べるだろ」

桑の実を食べられる頃だろうと父に聞いた。

「ああ、一杯なっているぞ。好きなくらい食べるぞ。でも、まだ少し早いかな」
母は、逆に注意する。

「あんまり食べて、腹壊すなよ」

小径の脇には、小麦がもはや色づき初夏の風に揺れている。

土手のそばの畑に着いた。もう昼時のサイレンが遠くからする。やかんを提げ、

「水、貰いにいってくるべ」

と言う母の後についた。土手の坂を上り切ると、先ほど渡ってきた川を挟み、家族の暮らす集落が一望できた。まだ頂上あたりに残雪を抱く山並みが、左手から右手へと里を抱くように座っている。集落の茅葺き屋根からは、昼間時の支度の煙が、澄み切った空に立ち昇り、吸い込まれていく。

土手を越すと、幾分赤味がかつた色の下り坂の小径が続く。小径のずっと先に、屋敷林のある人家が見える。棚田のような畑が人家を囲む。曲がりくねった道端にはタンポポやサランコ花が咲き、せせらぎにメダカも泳ぐ。土と緑がつくるのどかな佇まいだ。茅葺きの上に草が生え、花も何本か戴く見知らぬ家。小川が流れる門口に立ち、母は声を掛けた。

「水、貰いに来ました」

何の返事がしないまま、木綿の袋を水口に被せた水汲みポンプで振舞水（ふるまいみず）を汲む。井戸の周りには紫陽花が咲き乱れている。その奥の池には菖蒲が咲き赤い鯉も跳ね、泳ぎ回る。

「ほら、冷やつこいだろう」

母と私は代わる代わる両手で、井戸水をすくい取って喉を潤した。やかんにも一杯注ぐ。庭先には鶏が数羽放されている。縁側の雨戸は開け放されているが、人がいるような気配はしない。

母に聞いて見た。

「この家に、誰も居ないのが」

母は少し困った素振りをしながら、

「この家でも、弁当を持って畑に稼ぎに出掛けているのだねが」

「俺たちのように。ふーん」

そんな母の言葉で、納得してしまった。弁当と聞いて、すべてが許せるような気もした。

母屋の脇、馬小屋の方から物音がした。恐る恐る近づくと、家のカルハナとそっくりの馬が私をじっと見ている。そばに寄り馬の顔を撫でると、逆に顔をすりつけてきた。

「母ちゃん、カルハナじゃないが」

母の方を振り向いたが、母の姿はない。母屋に戻って戸口の周りを探すと、母は薄暗い家の土間にいた。何やら家の中の様子を伺っているようだ。ひんやりした土間の土壁には、見覚えのあ

る蓑が掛かっている。屋根葺きの時の半纏も掛かっていた。父のものとそっくりだ。壁際に釜戸があり、そのそばの板間には、家とこれまたそっくりな水瓶（みずがめ）がある。炉端には、緑の瓶に半分ほどのどぶろくに新聞紙で栓がねじ込まれ、そばに湯飲み茶碗が一つだけ置いてあった。板間は埃もなく綺麗に磨き込まれている。

何が何だか頭の中が混乱した。母はこれ以上見せまいとするように、私を土間から引きずり出そうとした。戸口での雨落ちで、板間の上がり口に下駄の鼻緒が目に入った。赤だつたか黒だつたか識別できなかつた。

「さあ、ぬるくならないうちに。父っちゃん腹空かして待つているぞ」

母は無理矢理、私を外に引き出した。紫陽花が咲く庭先を出る時、カルハナに似た馬のいななきがした。馬小屋からずっと私の姿を追っているかのようだ。

母と私は、赤味がかつた小径を戻り、また土手を越えた。土手の上で、川を挟んだ景色を何となく見比べた。水を貰いにいった家の様子は、いつか、どこかで見たような懐かしい、土と草の匂いのする風景でもあった。でも、なぜ住人がいなかったのだろうとも思った。そう言えば、川を渡ってから、誰にも会うことはない。こんなに麦畑が色づき、畑が緑なし、採り入れ時の野菜が一杯なっているというのに、それを耕す、摘み取る野良人を見つけることが出来ない。私に見えないだけなのだろうかと思つた。

「ユキオ、いつまで何してる」

土手を下りた母が呼んだ。

土手のそばの桑の木陰で、親子三人の昼飯が始まる。大ききの違うそれぞれの弁当箱。たくあんをおかずに、アルミ弁当にぎつしり詰められたご飯を箸で切り、通り抜ける緑風とともにほおばる。三人の嘯むたくわんの音が、パリパリ、ポリポリ、ポリつとしあう。

「うめえな、この卵焼き」

「ご飯とたくあん、そして梅干しだけなのに、私がそう言うとも母も、

「うめーだろう。母ちゃんの卵焼き」

「最高だ。ちよつとしよつぱいがな」

父もうまそうに言った。

平らげた弁当箱に、やかんの水を注ぐ。すぐアルミ弁当の外に雫がつく。父は、こぼさぬように角から水を上手に飲む。母は水を注ぎ、残したたくわんで弁当箱の底を綺麗にしてから呑み込む。その母の目の前をモンシロチョウがひらひら飛んでいく。それを追う母の目が点になっている。親子三人して笑い転げた。

ひと休みすると、もう父と母が麦畑で働く。麦の畝(うね)の間に植えている、また背丈の低い豆の草取りをしている。私はさつそく桑の木によじ登り、少しまだ熟し切れてない桑の実をかじる。酸っぱい味が口中に広がった。木の上からは、父と母が幾度も畝を往復するのが見て取れる。

二人は何かを話しているようだ。

唇を紫色に染め、桑の実が飽きてしまうと、裸足になってゴム靴を自動車に見立てて押し遊ぶ。土を入れてダンプカーの真似もしてみる。畑ではどこまでも道が続く。たまに、立ち上って父と母を探す。姿を確かめる。昼下がりの陽の下、こうして汗をかきながら遊び惚ける。

少しだけ風が冷たくなり始めた頃、母が私のそばにやってきて言う。

「さあ、ユキオは戻らねばな」

「うん」

と答えてから、当然、父も母も帰るのだらうと思つた。ところが母は、

「父ちゃんが、送つていつてくれるからな。姉ちゃんたちの言うこと聞くんぞぞ」

母はなぜ一緒に帰らないのか、どうしたのかと思つた。すかさず母に、

「一緒に帰るんだらう。トシちゃん、夕ご飯の支度して待っているよ」

母は頬被りを取り中腰になり、

「ユキオ、口の周りこんなにして」

手拭いで口の周りを拭き、私を見つめた。そして、ただ、ただ首を横に振つて見せた。母が帰れぬ理由など見つかからない。畑仕事だつて、もうじき暗くなるのに続けられるはずもない。そばの父は、途方に暮れたように二人を眺めている。

「だつて、一緒に俺と帰るんだべ」

私は母の胸を両手で、だたをこねるように叩いた。しかし、母は押し黙ったまま、首を横に振るだけだ。私はこの際だからと、

「やっぱ俺、大水の時、北上川で拾われた子だべ。母っちゃんの子供でないからだ」

困らせるような事を言っても、母は首を横に振るだけだ。見かねた父は、

「それじゃ、舟着き場まで一緒に行こう。そうしたら、ひよつとして母ちゃんの気持ちも変わるかも知れんからな」

仕方なく父の言葉に促され、

「ほんとだよ。みんなして帰るんだから」

私は更に強い口調で言った。もう、私は泣きべそをかいてしまっていた。

まん丸い白い夕月が東の山の端に上った。薄暗くなり始めた川辺の小径を三人して歩く。私は母から決して離れまいと、しっかりとモンペの脇を握りしめながら歩く。父は四、五メートル先を歩く。母は私の坊主頭をさすりながら、陽が沈もうとしている西の空を何度も見やる。道端に黄色い昼顔の花びらが異様に目立った。

否応なく舟着き場に着いてしまった。葦や柳に覆われ、少し入り江になった砂地に、昼間母を乗せてきた舟が舳先を乗せている。父は碇を舟に乗せ、舟の中に溜まった水を掻き出し、竿差す準備をしている。

突然、母に私は抱き上げられた。「しまった」と思い、抱かれたまま足をバタバタさせたが、すでに舟の床だった。あつと言う間だった。母は胸のあたりまで水に浸りながら、舟縁を思いっきり押し出した。私は迂闊(うかつ)にも母の手を離してしまった。父は目一杯竿を岸边に差し、突き放す。父と母に騙されたと思った。

「母ちゃん」

と呼んだが、父が竿差す舟は、岸边からすでに離れていた。私が川に飛び込もうとすると、腰まで水につかった母が、見たこともない怖い形相をして私を睨んだ。

そして、

「ユキオ、お前はまたこつちに来るな」

と叱りつけた。私は事の意味が理解できなかった。目の前が涙で滲み出し、母の姿がかすみ出す。泣きながら父に聞いてみた。

「どうして、母ちゃんだけ残るの。父ちゃん、母ちゃんを捨てるのが」

父は何も返答しなかった。ただ黙って川面に竿を差すだけだ。次第に色を失う川、母の姿が小さくなる。母はまだ岸边の水の中で、私を見送っている。

舟縁で私が、

「きつと迎えにくるからな」

と消えようとする母に、岸边に向かって叫んだ。そして舟縁で泣きじゃくった。止めどもなく

涙は川面に落ち、流れに流された。

父の舟が川の中ほど、川下に大きく舳先を変える頃、その舟を漕ぐ父の姿が、なぜか私に取って代わっていた。父が亡くなる四、五年前の頃、今の私になっていた。

その時、向こう岸には母の姿さえ、もう見つけることができなかつた。舳先には、あんなに泣きじゃくっていた幼い私の姿もない。先ほど叫んだ自分の声に意識を揺れ動かされ、また闇の中に引き戻されるような荒い息づかいが襲う。舳先を川の流れに任せながら、ひよつとして私は、父の振りをして母を父の元に、向こう岸に捨て去りに行ってきたのではないかと、おぼろげながら思った。

川の向こう岸、母が渡り、残された野辺の上に満月が照る。向う岸は薄黒い極彩色となつて野辺が揺れている。黒々と流れ下る川は、月明かりを宿し、光の橋をちらつかせ始めている。光の橋の向こう岸にも、こちらと瓜二つの世界があるのだろうか。父と母の暮らしがあるのだろうか。出来れば、私はそうあつてくれればいいと願つた。向こう岸に母を捨て去つていながら。

闇は障子を通して、白々と蒼い刻に移ろうとしていた。己の居場所を朦朧としながら確かめ、安堵の息を吐く。妻の寝息を聞きながら、また深い闇の中に誘い込まれる。今一度、父の舟を竿差し、月の河を渡る。

波女の店つこ

婆(ばば)の店っこは、風で飛んでしまいそうなちっちゃな建物だった。子供ら相手の駄菓子屋だ。

親たちは、

「小便した手も洗わず、食い物を売る」

不衛生だと言つて、婆の店っこへ行くことにあまりいい顔をしない。子供ら以外は、農協の近くにもう一軒ある隠居屋(いんきよや)という屋号の店っこで、ほとんどが買物をしていて。その隠居屋では、愛想のいい嫁さんが店っこを切り盛りしていた。

真夏の昼下がりに、学校に上がる前のおれ、幸吉がその婆の店っこに立っている。

婆、小便しにいったきり、なかなか戻つてこない。タタミ一枚ほどの三和土(たたき)で立ちんぼだ。十円玉握りしめて駆けてきたものの、まだジュースにはありつけない。右手にぎゅつと十円玉。左手に買おうとした赤紫のジュースが入ったガラスびん。

「婆、なにをした」

板間に膝小僧をつき、薄暗い奥を覗き込んだ。かすかに物音が伝わる。水が流れる音が、いや、婆の小便する音にちがいない。

オマルに蓋する音がして、やつと婆、店に戻ってきた。

「おめえ、まだいだつてが」

婆、おれが店で待っていることなど、もうとつくに忘れてしまっている。

「何、欲しのか」

「そうが、ジュースが」

と今日は物わかりがいい。婆に、手のひらを目一杯開いて十円玉を差し出す。婆、ほつれた白髪頭を少しかしげる。婆、またまた物忘れかと思つた。

婆、言う。

「この前、おめえにあめつこ代、確か十円貸したつたな」

「今日は、払つてもらうじゃ」

おれには、何がなんだか分からない話だ。婆、十円玉をはぎ取ると矢継ぎ早に、

「ささ、昼寝するからジュース戻して、さつさと家さ帰れ」

胸元から出したでつかいがまぐちに、しっかりとおれの十円玉を仕舞い込み、また奥に入つていった。

「婆…」

と声がかかかったが、それつきりだった。

何がなんだか分からなかった。分からないまま、無性に悲しくなつた。

仕方なく婆の店つこを出た。こんなことなら隣の隠居屋にすれば良かった。涙が溢れ、陽差しがかすむ。もう頭の中がぐるぐる回っている。滲んだ目の前を赤く氷と印した旗が通り

過ぎる。麦藁帽にランニング姿のアイスキャンデー屋だ。カランカランと鉦(かね)を鳴らし、家の方、南を指して自転車をごく。こんな時に限ってキャンデー屋がやってくる。家の前を通り過ぎ、ずっと行つてしまった。

家に戻るしかない。婆の店つこからおれの家まで二百メートルほど。さつきは、このカンカン照りの中、一気に駈けてきたのに、戻るはその倍も三倍もあるような長さに思えた。おれが握りしめてきた十円玉にはわけがあつた。だから家に戻るのが余計怖い。

それは昼間時、母つちやと二人。向かいの家の井戸から、やかんに汲んできたしゃつこい水をごはんにぶつかかけ、しよっぱいナス漬けでかき込んだ。昼飯済むと、母つちやは、昼間の照り返しを避け、板間で昼寝する。

「幸吉も寝ろ」

とそばに引つ張られ横にされた。すぐさま母つちやは寢息を立てた。開けつ放しの裏座敷からセミの鳴き声が伝ってくる。時折、ハエ取りリボンを揺らす風が、通り抜けるが涼しいほどでもない。

おれ、なんぼ目をつぶつても眠れない。さして眠くないもの、いざ寝ると言われてもできない。母つちや、ぐっすり寝入っているのを脇目で見て、いつも頭の隅にあつた作戦を今こそ決行しようと思つた。

板間と台所を仕切る障子の脇に筆筒がある。その引き出しには、母つちやが買物に使う、いつもの小銭入れが仕舞つてある。いつかその中から、十円玉を使いたい願望がおれにずつとあつた。泥棒だということは分かつていた。でも十円くらいなら、いくら何でも母つちやも分らないだろうと思つた。

母つちやの寢息を確かめ、そろりと起きあがり、筆筒まで這い出し、息を止めて引き出しを開けた。引き出しの中を右目で、母つちやを左目で確かめ、財布を開けた。十円玉と五円玉、そして一円玉が何個かあつた。脇には百円札らしきものが一枚だけおさまっている。音を立てないように、十円玉を抜き、半ズボンの右ポケットにしまいこむ。また、背後の母つちやの様子を見る。両手でそつとそつと引き出しを戻す。母つちや気付いていない。

板間から脚を先にして、尻を擦りながら土間に出る。上框(あがりかまち)に腰掛け、短ぐつを左、右と履き、ゆつくり泳ぐように大股で玄関の敷居をまたぎ、表に出た。

門口にかかる土橋をひとつ飛びに越え、照り返して白っぽい国道を北に向かう。ポケットから十円玉を取り出し、確かめ、ぎつしり握り婆の店つこ目指して駆けた。後からおれを照らす陽差しがつくる影を追つて、それを追い越さんばかりに懸命に駆けた。

そして、婆の店先で思いつきり、

「もーすー、もーすー」

と叫んで、婆を呼んだのだつた。

なのにジュースが飲めないどころか、母つちやの大切にしている財布から十円玉を盗んで、その大事な錢つこをわけの分からぬことで、婆に取られてしまった。おれの小さな頭の中ではどうやっても理屈のたたないことだった。

いやいやながら、家の門口に辿りついてしまった。門口から玄関を通して土間が見える。母つちや、畑におりる身支度をしている。家に入ろうかどうかしていると、

「幸、なにこの暑いのに外で遊んでいる」

「黙って昼寝すればいいのに。さっきアイスキャンデー買ってあげようとしたのに」

と中から何事もなかったように、気付いていないよう母つちやの声がする。

「だって、おれ眠くねえも」

とごまかし、馬屋の前のいつも泥んこ遊びする杉の根元に走った。

短ぐつを自動車に見たて、土いじりしていると、母つちやが畑に出掛ける際に、おれのところに近寄ってきた。もう分かれたらと思ってドキッとした。母つちや、麦藁帽子を上から無理矢理被せてきて、

「帽子も被らないで」

と言ひ鉢（かま）をかついで畑に出ていった。

盆を前にして、婆の店つこの前、母つちやと隠居屋に買物に行く時、通りかかった。内心ドキドキした。婆、この前の言わなくていい十円玉のことを話すのではないかとビクビクした。婆、店に見えなかった。店先を母つちやより速い歩数で、母つちやのモンペに隠れるように過ぎた。

母つちや、

「ちよこちよこすると、転ぶぞ」と叱る。

まずは第一関門通過の感じだった。

隠居屋で盆準備の品々を買った他に、墓参りの下駄を買ってもらった。

帰りがまたまた関門だ。今度は母つちやの左側にくつついて歩く。いつもと違うと思っつか母つちやは、

「自動車危ねぞ」

向うからボンネットトラックが揺れながら迫ってくる。深緑色のトラックの荷台には酒の空き瓶を入れた木箱が積んであるのが見える。横に千葉重酒店と太字がある。土ぼこりが舞い上がる。母つちや、被っていた手ぬぐいはずし、おれの口元を塞ぐ。土ぼこりが過ぎるまで我慢できない。

「母っっちゃ殺す気か」

「泥棒のおれを子供だと思わないのか」
と思うほど口を塞がれた。

婆の店つこの前だ。その前を通り過ぎようとして、母っっちゃ思い出したように、いや、少しためらいながら、婆の店つこに用事があると言いつける。何にいまさらとおれは思う。

「婆さま」

と母っっちゃ、店つこの奥に声を掛ける。おれは戸口の脇に隠れる。中で婆と母っっちゃが話す声がする。

外でブラブラしていると、母っっちゃが中から呼びつける。

「幸、幸」

しかたなく戸口で頭だけ、横からひよいと出す。

「なに、しよすつて、中に入れ」

おれはしかたなく母っっちゃのでかい尻に小さくなって抱きつく。母っっちゃはしょうがないという風に、婆を指して、

「ありがとうございましたと言え」

何やら婆、大きい醬油せんべいを目の前に差し出してくる。今日の婆、何となく優しくそうだ。おれは少し警戒しながら、

「ありがとうございます、しました」

ペコつと頭だけ下げた。

「盆下駄買ってもらったのが、よがったな」

婆、めずらしくおれの頭を撫でつける。それを嫌がって、貰ったせんべいを手にすぐ表に出た。店先のイス代わりのリングの木箱に座ってせんべいにかじりつく。ぱりつとしない。ぼさつとした湿気ったせんべいだった。

「申し訳ないな」

母っっちゃは、しきりに頭下げている。こんな湿気ったせんべいに頭下げることはないのになと思つたが、店先に出て、また帰り際に婆に向かつて頭下げている。こつちを向きながら、母っっちゃ着物の胸元に何か入れた。

「母っっちゃ、このせんべい湿気つてたじゃ」

「婆に、何、用つこあつたたのよ」

母っっちゃ、ちよつと返答に困つた風だが、絶対内緒事だと耳元でささやいた。

「盆来るので、婆さまから銭つこ借りのたのよ」

「誰にも喋るなよ」

母っっちゃの鬢(びん)付け、椿油の匂いを嗅ぎながら、おれ、この前の十円玉のことがあるから、母っっちゃに本当に悪いことしたなと思つた。そして母っっちゃ大変だと、手に持った

せんべいがやけに湿つぽく感じた。

盆送りの終わり、おろした下駄も足に馴染んできた。少しだけ涼しくなり、稲穂も色づき始めた頃、おれは用足しを言いつけられた。大豆一升を布袋に入れ、継ぎはぎした風呂敷包みで背負われ、豆腐と油揚げを買つてこいと言われた。

左腕に竹籠を引っかけ、道端の石ころを下駄で蹴りながら、よろよろになつて隠居屋に行く。ハッタギが飛んで出る。トンボが空を舞う。コスモスも青空に映えて揺れる。道路工夫がスコップを担いで過ぎていく。おれは恥ずかしいから顔を伏せる。

婆の店つこの前にきた。その日は戸口が閉まつていた。店つこ休みかと思つてガラス戸からそつと覗いてみる。だが何の気配もない。

板間の奥にぞうりが見えた。戸を引くと開いた。何気なく店つこに入つて様子を伺う。店つこの真ん中の柱に、おれの好きな甘納豆のくじがぶら下がっている。せんべいや味噌パン、あめつこを入れたガラス箱の上に、ぽつりと裸電球が下がっている。

間もなく奥の木戸を開ける音がしたと思うと、土間に陽が差し込んだ。婆、洗濯物を取り込んでいたのだ。おれに気付いて、

「今日、何欲しいのや。ジュースかあめつこが」

と、取入れた腰巻きを手に聞いてきた。

「店つこ閉まっているのがと思つて」

説明のつかない返答をしていました。

「まさか、おめえ何か盗つてねえいな」

おれはドキツとした。本当は、婆もないから、何かこつそり盗つても分からないだろうと、思ったことは確かだった。

「そんなことしてねつてば」

首を横に振つた。婆、また聞いてくる。

「背中に背負つているの大豆だべ」

婆、今日は勘がするどい。

「うだ、隠居屋で豆腐と油揚げ買うのだ」

「隠居屋より高く買うぞ」

婆の話、悪くないと思つた。少しでも高く引き取つてもらえば、母つちやも助かるだろうし、この前の十円玉の罪滅ぼしになると。

「どれどれ、ここさ降ろせ」

婆、もうその気になり、風呂敷包みを開け大豆の布袋の紐を解き、手を突つ込む。大豆をすくい上げ、

「いい大豆だども、ちよつと虫食い混じつてるな」

「一升百円だども、九十円だ」

婆、十円値切ってきた。おれ大豆の代金知らないので、しかたなくまた婆の言いなりだった。

婆、大豆を角缶にぎーと空け、布袋とともにいつものがまぐちから、十円玉を一個ずつ取り出し、皺だらけの手で差し出す。

「まだ、持つてこな。今度こそ高く買おうがらな」

婆、えらく愛想が良い。隠居屋に行こうと店っこ出ようとすると、

「おめえ、ちよつと待て。頼みっこある」

「さき、上げ、上げ」

と急ぎ立て、奥の部屋に押し込まれた。

店っこの板間の脇、北向きの三畳ほどのタタミの間が、婆の茶の間兼寢室らしい。茶ぶたいの他に小さな茶箆筒しかない。押入はあるものの布団がまるめて隅っこに追いやられ、枕だけが上に載っていた。

婆、板間に続く土間、七輪で湯を沸かしているらしく、襟（えり）に手ぬぐいを挟んだ背を丸め、団扇（うちわ）でしきりに扇いでいる。

「なんだつてや、なかなか点かないな」

「おれ、めごいから煙ばかりくる」

婆にしては何かウキウキしている。おれは茶ぶたいを前にかしこまって正座している。襖は破れているところもあり、中村錦之介や東千代之介が載った雑誌を貼って取り繕っている。

婆、やかんと湯飲み茶碗二つ持って、茶ぶたいの前に、よっこいしょと座り込む。茶碗二つを置いて、やかんから湯を注ぐ。

「さあ、飲め、飲め」

「何か食いたければ店から持ってこい。ただし、銭っこはもらうぞ」

婆、うまそうに白湯(さゆ)飲んでいる。おれはもじもじして、上がるんではなかったなと思つた。早く用事を言つて欲しい。

「うだうだ用つこだったな」

と言つて、また白髪頭をかしげた。思い出せそうもない。

「忘れてしまった。思い出したらまた頼むから」

人を呼び込んでおいて冷たい。しかたなく、

「ごちそう、さまでした」

と部屋を出た。下駄を履き立ち上がると、婆言う。

「忘れることも出来るから、いっぺ悲しいごどもくぐれるのよ」

婆にしては、理屈ばい言葉だった。

結局、婆の思い通りおれは、また十円損させられてしまった。隠居屋で言いつけられた豆

腐と油揚げの数を買って帰ることはできなかった。母つちゃんに、

「用つことも、ちゃんときかないで」

と叱られた。いつまで経つても、十円玉のつけは付いてまわった。

その後、何回か隠居屋に用足しを言いつけられた。もうごまかされまいと、婆の店つこには顔を出さなかった。

道路脇が一面黄金色になり、稲刈りも近づく頃、いつものように隠居屋に出掛けた。婆の店つこは閉じていた。内側からポロ布が掛けてあつて中が見えない。どこかに行ったのかと思ひ先を急いだ。もう、婆のことはどうでもいいと思つていた。

バスが農協の停留所に止まった。二人ほど降りたが、婆の影はなかった。その農協の入口の壁に赤いポストが掛かつてあつた。最近ひらがなを少し覚えたおれに、差し出し口に「すお」と書いているのがやつと読めた。

「塩入れるのか」

と独り思つた。

隠居屋で言いつけられたいつもの豆腐と油揚げを買い、竹籠に両手で抱え引き返した。油揚げは好物だ。豆腐を崩さないよう用心しながら、また、婆の店つこの前を通りかかった。見まいとしてもなぜか目がいった。店つこの脇にある柳の木と今にも倒れそうな婆の店つこ

がぼつんとある。柳の下を狭い堰に水がちよろちよろ流れていた。

婆の店つこは、それつきり開くことはなかった。

二、三日経つてからのことだ。婆、汽車に轆(ひ)かれていたのが線路脇で見つかったのだ。小学校の裏、平林に行く途中の踏切から百メートルほど南のところ、田んぼの脇で婆が発見された。だから発見が遅れた。

どうして汽車に轆かれたのか分からない。どこかに行った帰り線路を歩いてきたのか。それとも何か深いわけがあつて、汽車に飛び込んだのか、分からない。誰も教えてくれなかった。

母つちや、婆から盆前に銭つこ借りたけれど、返したのだろうか。誰にも言つてはだめだと口止めされたので、あれ以来忘れようとしている。母つちやも、婆死んでも涙流すわけでもなく、普段通りになっていた。おれも十玉盗んだことを黙つているように、母つちやも婆から銭つこ借りたことを黙つているつもりなのだ。その後、婆の話は誰ともしなくなった。

稲刈りも済んで秋祭の頃、婆の店つこが壊されることになった。町場から青いトラックに半纏をまとつた人足四、五人が乗つてやつてきた。屋根に上がつたり、壁を木槌で叩いたりした。もうもうと土煙があがつた。

その解体作業の中、婆の店つこの奥の納戸の床下から甕が見つかった。その甕に小銭が一杯詰まっていたという。ひよつとしてあの時、奥の方で水が流れる音がした、小便の音だと思つたのは婆が銭っこすくつては、ニタラニタラと眺めていた音だつたのかも知れない。

でも、なんであんなに銭っこあるのに、最期は汽車に轢かれて死んでいったのか、おれは不思議だつた。

半日ちよつとで、婆のちつちやな店つこは、トラックで三、四回、山ほどの木材を積んで往復すると、その跡は地べたばかりになつた。道端はがらんとなり、たつた一本の柳だけが残された。

甕の小銭は、今まで音信不通だつた婆の息子だというやくざ風の男が、ひよいと木枯らし一番に乗つて現れて、全部持ち帰つたという。男は隣近所に、

「お袋、世話になつて」

と、えらく愛想よく頭を下げたらしいが、本当に婆の息子だつたのだろうか。

婆の店つこは、もうおれの記憶からすら消えかけようとした。小学校に上がつてから、柳の前を毎朝、学校から帰る度に通る。その度、婆のこと、母ちゃんの財布から十円玉盗んで、握つて駈けたこと。わけの分からぬまま十円玉を婆に取り上げられたことだけは思い出す。

母つちやも、婆からあの時、銭っこ借りて返さなかつたこと、忘れてないのだろうか。そ

れとも、おれの知らないうちに返してしまったのだろうか。母っちゃんには聞けない。

それから二、三年して、おれが野球少年で毎日が忙しくなった頃、あの残った柳も切り倒されてしまった。やがて、婆の店っこあつた場所に、奥羽の西山の鉾山が廃山となつて、家族共々移つてきた家が、糸っこ商店が新しく出来た。

野 犬

「お前の犯行は、決して見逃しやしない」

瘦せこけて眼孔だけが鋭い野犬が睨む。首を繫(つな)ぐ縄切れの一方を懸命に握る平吉は、嘯みつこうとする野犬を、ゴム長靴でしきりに威嚇(いかく)し追いやる。やつこのことで、屋敷裏の梨の木に野犬を結わえる。今朝方から降る雪の中、戻る平吉の背に、

「見逃さないぞ」

と再び野犬は唸(うなり)声をあげる。

平吉は女房に隠しごとがある。近所の精米所へ飯米用に紛れ込ませ、ヤミ米にまわすモミと一緒に持ち出し、その亭主に頼み込み現金化をもくろんでいる。平吉は農協への内緒の借金があり、返済に困っているからだ。

モミを持ち込んだ時、野犬は精米所の脇に繋がれていた。その際、平吉は野犬と目を合わせてしまった。小心者の平吉はそれからというもの、自分の隠しごとを野犬に見透かされたような妄想に陥っている。

今朝方、縄をつけたまま逃げ回っているのを、これ幸いと何とか縄をたぐり寄せ捕まえたという訳だ。平吉はこれからどう完全犯行を成し遂げようかと密かに思っている。

平吉が潜む、とある北の田舎町。まだ、出稼ぎが盛んにならない時分だ。わずかばかりの田畑でも、食うことが出来る田舎の方が焦土と化した都会より増しな頃だ。正月気分が尾を

引く小正月も過ぎると、寒さが一番底冷えする大寒に入る。部落一面が真綿の雪に包まれ、デコボコ道を行き交うトラックやボンネットバスのチェーンの音が「ガシヤ、ガシヤ、ガシヤ」と家々の軒先に響く。こんな雪の部落で冬場に働き場や行き場のない男たちは、長くツララが下がる萱(かや)葺き、馬屋の土間で春先まで藁(わら)仕事に精を出す。作るものは、縄、筵(むしろ)、俵(たわら)、ケラ、蓑(みの)、草鞋(わらじ)など、そのほとんどは藁が材料だ。春が来るまでじつと雪に埋もれて暮らことになる。

「早えげす。今朝もしばれるなあ」

「随分朝から、うるせえ犬つこだごと」

好太郎と豊造が弁当持ちで、それぞれ稲藁の束を抱え、平吉の家に顔を出す。

「一体、どこの犬だ」

と豊造が、藁仕事の座に着こうとしながら言う。馬小屋の脇、土間に筵を敷き車座になっている。周りの土壁の際に唐箕(とうみ)、馬鍬(わぐわ)、足踏み脱穀機などの農具が寄せられている。蜘蛛の巣がホコリを吸い込み垂れる天井には、梁に板を渡し藁や干し草の束、筵などが上っている。時々鼠も走る。土間に干からびた藁の匂いに七輪の炭が熾(おこ)る匂いが混じる。

「今日、正吾はかじゃらねのが」

また豊造が正吾の兄平吉に聞く。

「んにゃ、その内降りで来るべ」

平吉は曲がりなりにもこの家の主だ。お人好しがゆえ、こうして部落で行き場のない男たちが集まつてくる。女房は、少なからずその世話をする羽目になる。もちろん機嫌は良くない。正吾は平吉の末弟で、三十近くになるが定職を持たない。だが、親の栄蔵が健在なので、義姉もこの居候(いそうろう) *おんちゃま)をそう邪険にも出来ない。

「よつ、好太朗さん。もう一服が」

ニタニタしながら、噂の正吾があくびをしながら馬屋に降りてくる。

「お前、まず藁打ちしてしまえ」

平吉は正吾に藁打ちを命じる。馬小屋を仕切る壁の脇、伏された白の底で藁を一束ずつ、木槌でやる気なさそうに打ち込む。馬屋中に餅つきの音にも似てその音が響く。馬も少しうるさげに、奥の隅の方に避けて座り込む。

「ところで豊造さん。この前のかせどり、おもしえがったが」

正吾がもう飽きたらしく、手を休めて聞く。

「そのごどだよ。散々な目に遭ったじゃ。この泥棒と言われ、危なく水掛けられるごどだった。雪をこいで逃げで帰ったじゃ」

かせどりは、この土地の小正月の行事だ。厄年の男たちが晩になると、扮装し奇声を上げ、部落の各戸を訪れモチをせがむ。時には悪さもたくらむ。豊造は言つてないが、あの晩ガラ入戸越しに風呂場を覗見(のぞきみ)したのだ。だが、その女房ではなく婆様だったことを。

「まったく、危なかつたな」

平吉は、黙つて話を聞きながら俵を編んでいる。一方豊造と好太郎は縄をなう。手に再三唾をつけ、なつた縄を尻の下を通し、後ろにまあるく輪をこしらえるように追いやる。その量をみると、かなり豊造の方が多い。

「あつ、寒めな。ながなが止まねえ雪だな」

正吾は七輪で手あぶりしながら、胸元のポケットから煙草を出そうとする。

その時、外で足を踏み、雪を振るい落とす音がする。

「やあ、精がでること。よく降る雪だな」

がたびし板戸が開き、外套を着込んだ男が人なつこそうに土間に降り立つ。男たちに一瞬緊張が走る。特にいつも悪さが絶えない好太郎と正吾は、反射的に目配せする。豊造とて、もしやあの晩のことではと、言い訳を探す。

「仕事中最悪いな。何のことはない。この前のモミっこ泥棒のことよ」

「実は、モミっこが往還西(おおかんにし)の畦道(あぜみち)にこぼれていてな。お前さんた

ち、何か知らねえか」

男たちはみんな駐在の話に、頭を横に振る。

「なに、精米所も悪いのさ。しつかり戸締まりもしなかったのだから」

「盗まれた量も二袋だもな。でも、米つこのねえ時節柄、欲しい奴はいくらでもいるべな。まだ年を越したばかりだ。飯米に事欠くのは、百姓家では考えられないしな」

駐在は、ひと通り事件の話を済ませた。七輪の火で一服しながら、犬の鳴き声に不審がったが、平吉が家の犬だと咄嗟(とつき)に答えた。帰りがけ、意味ありげに一言付け加えた。

「そういえば、モミつこが落ちていた所に、靴跡と一緒に犬つこの足跡も残っていたな。そいつは犯人の犬、いや絶対に犬は犯人を目撃しているはずだ。まずまず、邪魔したな」

と駐在は雪の中に背を丸めて出て行った。

平吉と豊造はほつとしている。モミ泥棒の件は、駐在がヤミ流しを知っていて、精米所に裏金をせびり、そのため精米所がモミ米を度々盗まれたと嘘の届け出をしているとの噂もある。だから駐在の捜査も本腰でない。

一方、好太郎と正吾は、目を交わしながら、そんなこと知る訳がないという素振りをしていく。すると自分のことではないと、一難去った豊造が、何やらが不思議がった振りで、

「まさか、お前らでないべな」

知らん振りを決め込む二人の不意をつくように、半分冗談まじりに言う。

「やってね、やってねーってば。なんで俺たちが何の魂胆（こんたん）があつてするってや」

好太郎が慌てて全面否定する。それを聞いていた平吉は、この時完全犯行の糸口に辿り着いた思いだ。

出来るだけ平静に取り繕い平吉は、

「だどもな、裏の梨の木に繫いでいる犬っこは、もの言わないかも知れないが」と意味ありげに言葉を投げかける。

「そうだ、お前らだべ。今さら隠すなよ」

豊造がたたみ掛け、尋問するように迫る。男たちは、それぞれの思惑で事件の犯人探しだ。

裏からする遠吠えに促されるように、

「いやはや、実はな」

好太郎がついに重い口を開く。好太郎は一応正吾の兄貴分だ。馬も首をこちらに向け、聞き耳をたてている。好太郎が続ける。

「その話だが、正吾と二人して鳩を捕まえようと、モミっこを一升ほど持ち出し、畦道に捲いた。確かその時、犬っこも鳩を狙い、周りをうろついていた。なあ正吾」

「モミっこ持ち出したのは俺だ。だども、精米所からなんか盗んでいないじゃ」

二人は往還西のモミの件について、自分たちがやったと自白した。

そして付け加え、

「だども、決して悪いごどした訳でねえ」

「んだべ、悪くねべ。だども犬つこが…」

平吉も豊造もこれ以上詮議(せんぎ)することは止めた。かえって藪(やぶ)へびとなる。平吉は次の手を直ぐさま考え、好太郎と正吾に命ずる。

「すると見ていたのは、犬つこだけだな。だとすると、裏の犬つこはこのままじゃわがねべ。どうにが始末してすまえ」

「裏で吠える犬つこは、そいずだつてが」

豊造はやつと裏の犬に合点がいったようだ。

「どうするつてや」

と言う好太郎に続き正吾は、

「殺して、肉汁にして食うのも旨がもな。皮とか骨はとりあえず雪の下さ埋めで置くべ」

「んだな、いいかも知れねえな」

男たちは一応、事の結論に達した。

平吉はみんなの気が変わらないうちに、

「そしたら準備だ。正吾、豆腐買ってこい」

と命じ、平吉が朝から気になっている野犬の始末を、好太郎と豊造に有無も言わず、

「それで殺すのは、二人に頼むじゃ」

成り行きに逆らえず二人は、家の裏手に回り、仕方なく野犬の処刑と処理班となった。

平吉は母屋に戻り、訳は一切言わず女房に、昼飯は肉汁にするから用意をと言う。

「何の肉でや」

「いや、肉は用意するがら、鉄鍋の準備とネギを刻んでけろ。豆腐は正吾が買いに行った」
炬燵(こたつ)の脇で、大豆の選別をしていた栄蔵が、

「何、昼間がら肉汁だ。旨そだな俺にもな」

と眼鏡越しに声を掛ける。平吉はこれでみんな同罪だと、内心胸をなで下ろす。

屋敷裏でしきりに野犬が吠える。しばらくすると、「キヤーン」と、甲高い断末魔の一鳴き
がしたつきり、車のチェーンの音だけとなった。平吉は、事は無事手はず通りに進んだよう
だ。後は一刻も早く己の胃袋の中に、あいつを押し込まねばと、女房の用意した鉄鍋を提げ
て馬屋に戻る。

これで地吹雪が終わる春まで、何とか逃げ通せると平吉は確信した。だが、ひよんなこと
で女房に事の次第を追求され、平吉の完全犯行がもろくも崩れ去る日も近いのだ。

稻妻

昼下がりがだというのに、大通りはライトを点けた車が行き交う。頭上に覆い被さった黒い雲から、今にも雨粒が落ちそうだ。もあつとした空気が行き場を失い通りに充滿する。

ATMコーナーは、それでも幾分冷房がきいている。三台の機械が並ぶが、この空模様を気にかけてか、めずらしく誰もいない。黒ずくめの男は一番奥の機械の前に立ち、胸元から財布を取り出す。カードを抜いた瞬間、眼前が白む。閃光とともに地面を引き裂くような音が続く。雨が叩きつけ始める。

一瞬たじろいだ男が、再度機械に相対すると、操作盤の上に置き忘られた緑色のカードを見つけ、誰が忘れていったのだろうと思った。男は咄嗟(とつき)に、お金を引き出すことをやめ、背後に人気がないことを確認する。何か忘れ物でもしたような素振りをして、「ついでないな」と言うふうには、すぐさまそのカードを財布に仕舞い込み、表通りに飛び出た。大粒の雨が車道を激しく叩きつける。アーケードの店寄りに人は濡れまいと沿って歩く。

男は行き先も考えず、とりあえず雑踏に紛れ込む。このカードをどうしたものかと、人に紛れて思いを巡らした。鼓動は極度に高まる。突然舞い込んだこんなチャンスはそうない。だが、カードを使おうとしても、当然暗証番号は分からない。限りなくその数字の組み合わせは多い。かといって、いつまでも持つっていると紛失届けが銀行に出されれば、逆に捕まる危険性も出てくる。

男は腹を決めた。なるべく長い時間居ても、人に会うことが少ない確率のATMコーナー

で試めすだけは試めそうと。街中この土砂降りに気を取られている、チャンスだ。そう男が覚悟を決めると、窓口を閉じたがATMコーナーだけ残る店舗が頭に浮かんだ。

大通りを出て雨に叩かれ、濡れながら深緑色の欄干の橋を渡った。街のど真ん中を流れる川向かいのアーケード街に入った。ATMコーナーは、これも運良く人影がない。男は、どこまで今日は運がいいのだとほくそ笑む。監視カメラを意識し、落ち着きはらった素振りでもカードを差し込む。そこで戸惑った。どう入力しようか。重複せずに効率よく番号を入力するにはと考え、まずは一の位を中心に、1111、1112、1113と動作を繰り返す。その度、機械から暗証番号が違うと、伝票が吐き出される。もう気が気ではない。

とうとう一つ挟んだ隣の機械に年配の婦人がきた。赤い傘を左腕に掛けながら、振込しようとしている。それを脇目使いに汗ばみながら男はもうその時、暗証番号のタッチパネルを押ししていた。何とあろうはずが、引き出し金額入力の画面に変わっていた。

「ウッソー」

と、一瞬声を漏らし、驚き一步のけぞった。婦人はどうかしたの、というような視線を投げ返してきた。男はごまかし笑いをかけながら、とりあえずこの際百万円だ、と打ち込んだ。すぐさま残高が足りませんと出た。それじゃと、五十万。またまた残高が足りませんと出る。十万、これも残高が足りませんと出た。不審がる婦人を意識して男は、

「おかしいな、まだ振込してないのかな」

と言つてみた。仕方がない、それじゃ一万円とすると、機械が動き出した。婦人も良かったねというような笑みを返してくれる。

カードと伝票が出てきて、札入れ口が開き一万円札が顔を出した。こんな苦勞をして一万円かよ、と内心嬉しいやら悲しいやらだ。ここはとりあえずと自分に言い聞かせ、胸元へと仕舞い込んだ。ATMコーナーを出ながら、男はいつたい暗証番号をどう入力したのか。思ひ出そうとしたが1の数字しか定かではない、浮かばない。

次の作戦をと、人通りの少ないアーケードのベンチに腰を掛ける。念のため伝票をのぞくと、残高1,074円であった。男は啞然とした。ひどく悲しく、哀れにさえ思った。取引先名を目で追つて自分を疑つた。

「タカハシユキオ」

「えっ、俺と同名同名。まさか」

と思ひ、カードを取り出し確認すると、タカハシユキオとあつた。銀行口座番号も見覚えのある預金番号だ。

「とすると、このカードは俺のカード」

男の肩が急に力無く落ちた。

大通りのATMコーナーで、男が財布から自分のカードを取り出し、次の動作に移ろうとする時に記憶をかきけす何かがあったのか。

「そういえば、稲妻が鳴った」

あの瞬間、男は意識を表通りにとられ、自分のカードを、置き忘られたカードと勘違いをしたのか。でも何で、自分のカードの暗証番号を入力したのか。それは、隣の婦人に気をとられ、男の生まれ月とそれに続く生まれた日を無意識に入れてしまったのだ。

知らず知らずに擦り込まれてしまった電腦社会で生きるための識別記号。1111に限りなく近い、男の誕生日の話だ。

お
歯
黒

芥子色(からしいろ)の水引暖簾を秋風が抜ける。

昼下がりの陽を背に、たじろぐふたつの影がある。

「おばさん、一本ずつでも店でいい？」

勝手場と店先を仕切るガラスケース越しに女が訊ねてきた。夏場は多く拵(こしら)えないので、ケースには数本の串団子しか残っていない。

「あゝ、お愛想なしだが、よがんすよ」

ふたり連れを狭い店に招き入れた。お萩の粒餡拵えの手を休め、指差された漉餡(こしあん)と胡麻(ごま)の二本を大皿に並べ、残る垂れもまぶす。店と言つても、亭主が達者で差配(さはい)をしていた時分に造作し、手も入れず三十余年が経つ。擦切れた雑巾ババア同様、くたびれたものだ。

「何か、無性に泣きたくなるんだよね」

画帳を抱えた男が、なぜか古びただけの店が気に入ったようだ。ペンを動かし、連れに同意を求める声がかウンター越しに届く。

「木村さんはこういうの、好きじゃない？」

「えゝ、嫌いじゃないですよ。田舎の祖母の家のように、何か妙になごみますよね」

「ね、そうだろう。すごくいい雰囲気だね。木村さんが生まれた頃の時代様式だけど」

何やらひと回りほどの歳を埋めようと、昔語りに興(き)きよう)するふたりを邪魔したが、大

皿をテーブルに運んだ。さつそく女が自分の注文通り漉館に手を伸ばすと、なぜか男が止めにかかる。脇で茶を注いでいると、やはり女は漉館にしたいと頑なに言い張る。なぜ女が胡麻を避けるのかピピッと来た。長く色んな客を見て来たババアの第六感だ。

男の問い詰めに、

「いや、今日はいいんです。本当に」

とまで断る女に、男の勝手放題を許せず、

「女には恥じらいというものがあるがな」

茶を出す際、男にひとくさり言ってやった。男は分った振りでしきりに女に謝るが、女の困惑が分るほどデリカシーとやらがあるか疑わしい。

女が首を少しすくめ態度を変えた。

「でも、いいかな。後で嫌いにならないで下さいね。だけど、少し行儀悪くはないかしら。

桑島さんの団子への美意識崩れやしない？」

「まあ、少しだけはね。かと言って冗談にも一本の串をかじり合う訳にもいかないよ」

ふたりが拘(こたわ)る美意識なるものが団子にあるとは、この商いを始めて此の方識らなかつた。だが、美意識などで団子を弄んで貰つては困る。このババアが許さん。

どうぞご勝手にと、ふたりに割箸を差し出してみた。案の定、串から四個ずつ抜き取り、ままごと遊びのように皿の上で騒ぎ戯れ出す始末だ。男が「それじゃ、半分ずつ」と女にす

すめ、厄介な一幕を無事終え、やっと食べ始めた。

勝手場に居ても男の甲高い声が届く。よく喋る男だ。

「澆館がいつも先でね、その次に胡麻。今日は売り切れだけど、締めはやはり醤油だな」

男がほざく講釈の理由を女が訊ねる。女も幾分理屈っぽい。男はこの土地の出のようで、餅料理の食べ方に結びつけて話かけて来た。

ババアにはとんと面倒臭い話だ。順番はどうであれ、団子は拵えたてを食って貰うのが一番。その日限りの賞味期限、毎日が旬だと言つて退けた。「そうそう」と、女は分つたような持上げ方をするが、賞味期限の一言がよほど効いたらしく大人しく食べている。二本の団子にえらく時間がかかるふたりの客だ。

何を描いたか男が画帳を閉じ、胡麻をつまみ、

「ところでおばさん。干支(えと)は何？」

「ねえ、おばさんも一応女性よ」

追つて止める声も重なる。亭主が死んだ後、がむしゃらに立働いて来たので、女を忘れた。だが、あいにく眼も歯も、耳は格別にいい。

「関東大震災の亥年(いとし)生れ、八十歳だ。甘いもしよっぱいも、散々なめて来た団子屋だ」

女がバツ悪そうに、「上手い」と手を叩く。男はふた回り半違いの卯年だと言い、どきどき

に女の干支も聞く。ババアの事ならともかく、野暮(やぼ)な男の唐突な襲撃に、女は髪を掻上げ、本気とも嘘ともつかぬ膨れ顔を見せ、

「おばさんとは丁度今が半分よ。漣館を一本終えて、しよっぱい醬油世代に突入かな」

「木村さん、ゴメンゴメン。そうか、おばさんも今まで人には言えない色んな苦労して来たんだろうな。あつ、木村さんじゃないよ」

「え、私はバツイチのおばさんですよ。桑島さんこそ、ごまかしの胡麻世代よね」

まあ、ババアにはどうでもいい二幕の展開だ。有難くも皿の垂れを綺麗にしてくれている。

女が茶を一口飲み、男に齒をむき出す。

「ねえ、私、お齒黒になつていない？」

「大丈夫、大丈夫。あつ、そうだったのか」

「桑島さんたら、分つていなかったのか」

やはり、この男は女の恥じらいなど金輪際(こんりんざい)気付いていないのだ。

また、男が取り繕(つくろ)う。

「ゴメン、お齒黒(おはぐろ)だつて嫌いじゃないよ」

「そうかしら、桑島さんにそう言つて頂くと、ちよつと嬉しいな。賞味期限間際(あじなま)だし……」

女も三幕への期待感を膨らませる。まだ懲(こ)りてないのかと、ババアは怒鳴(こ)りたい心境だ。

帰り際、まだもつて口数の減らないヘラヘラ男の尻を思いつ切りぎりりと捻(ひね)る。水引暖簾(みづひきだま)を

が
バ
タ
バ
タ
吹
か
れ、
ふ
た
り
連
れ
を
追
い
出
す。

骨箱

ふた七日して、やっと文郎が来た。

朝一番の新幹線で上野に着いたらしく、すぐ俺の待つ区役所に顔を出した。高齢福祉課の担当窓口で、文郎は一枚の書類を出して俺の名前と関係を告げる。

「佐藤寅松の甥、佐藤文郎ですが……」

女の職員は用件を確かめると、窓際に席を置く年配者、担当の鈴木さんに甥が来たことを告げた。鈴木さんは、俺が死際から口では言えないほど世話をかけた方である。すでに退職したのだが、雑務要員とやらで再び区役所に席を置いているのだ。鈴木さんの背中、窓越しに銀杏の葉がすでに色づき揺れている。

女の職員は再び戻ると文郎に伝えた。

「今、係が用意しますのでお待ち下さい」

幾分力じ臭い地下の一室、俺の骨箱ともうひとつの骨箱を鈴木さんは両腕に抱え取り、

「佐藤さん、お迎えが来ましたよ」

一声掛けて、薄暗い階段を少し猫背になりながら、俺を文郎の待つ二階まで運ぶ。

俺は若い時分から、自慢することでもないが極道だった。些細なことで務所通いを繰り返した。文郎は俺の兄貴の末子で、小さい頃は人一倍可愛がったものだ。周りでは俺が父親ではないかと噂する奴もいた。居候し世話をかけている義姉（あね）さんに、そんなことで肩身

の狭い嫌な思いをさせまいと、俺の居場所を探しトランク一つで都会へと逃げ込んで来た。直ぐに極道の手先となって風を切つて歩いた。ずつと、所在は知らせなかった。当然ながら、文郎の父親がだいぶ若くて死んだこと、最近になり義姉さんが死んだことも知らなかった。

鈴木さんの両腕の中、文郎と久しぶりの再会だ。ふたつの箱に、さすが驚きを隠せず、

「えっ、お骨はふたつもあるのですか？」

咄嗟（とつき）に文郎は鈴木さんに訊ねた。

「開けて、ご覧になりますか？」

鈴木さんはそう答えながらも、所定の受取手続き用紙に、文郎の署名と捺印を求めた。不審顔で署名をしながら、文郎はすでに頭の中が混乱しているようだ。迷惑がつてもいる様子だ。とりあえず署名だけを済ませて、

「つまり、叔父のふたつの骨箱は……」

文郎の問いに呼応し、鈴木さんは俺の骨箱に手をかけ、おもむろに説明を始めた。

「実は……、もうひとつの骨箱は、叔父さんが生前持たれていた、いや、正確には残されていたものようです」

「亡くなった木賃宿、その押入にあったものです。宿の主人の立ち会いを得て、私共が遺品として預らせて頂いていました」

真新しい白布に包まれた骨箱は、文郎にさえ俺であることは見た目にも分る。かなり黄ばんだもうひとつは、俺が死ぬ間際まで持ち歩いたものだ。文郎はきつと誰かのお骨なのだと推測しているのだろう。

俺がほんの一時期、所帯を持ったことがある。もちろん内縁であった。兄貴の家へ月夜の晩に一度だけ、ほんの束の間顔を出したことがあった。義姉さんに逢わせて安心させたかった。だが、あの女とも長続きしなかった。結局、俺は女に見放され、挙句の果ては独り年老い、この都会の片隅で寂しく死んだということだ。本籍地照会とやらで、文郎には嫌な役目をさせたが、上京して俺を引き取って貰うことになったのだ。

「誰の、いや、何のお骨なのか分りますか」

俺の過去の事情もあるので、文郎が小指を立てて見せ、俺が切り落とした物かという風に、もうひとつの骨箱の中身について訊ねた。

鈴木さんは小指を勘違いしたらしく、

「いやいや、奥様のお骨でもありません」

「それが……、実はお骨ではないのですよ。気掛りでしたら開けて見ますか」

俺の小指でないことに、文郎は胸を撫で下ろしている。さすがに文郎もこの場で骨箱を開けることにはためらっている。何が出て来るのか怖いのだ。鈴木さんにとっては何でもないが、

極道の縁者には開けたくはない、知りたくないパンドラの箱だつたりもするのだ。

鈴木さんが穏やかに文郎を論(さと)すように、

「まあ、びつくりするようなものではありません。出来れば、叔父さんと一緒にねんごろに供養して頂ければ良いと思いますよ」

「そうですか……」

いまだ釈然としないようだが、鈴木さんに促されるように、文郎は書類に捺印をした。

「それから、これは埋葬許可証です。紛失しないで埋葬管理者にお渡し下さい」

全て手続きを終え、文郎は茶封筒に入った埋葬許可証を鈴木さんから渡された。それをカバンに仕舞い込み、用意して来た風呂敷を取り出し俺を包み始めた。文郎には気掛りなことがもうひとつあるらしい。

「費用は、どうすればいいのでしょうか」

「私共の区役所の方での負担です。叔父さんのような方々が、都会には多いのですよ」

有難いことだ。俺のような生き様を背負い、誰にも看取られることもなく無縁仏となる者にも、最期の見送りをしてくれる。

先に俺の骨箱を包み終え、もうひとつの骨箱をどうしようかと文郎は戸惑っている。

「あっ、そうでしたね。何かもう一枚、包むものを用意しましょう。少しお待ち下さい」

鈴木さんが席を外すと、文郎は手持ちぶたさのようので、黄ばんだ骨箱をまじまじと眺めて

いる。そして、両手を差し延べて触れた。骨箱が簡単に持ち上がり驚いている。

「思ったより軽い……」

文郎は声を上げたが、一層もうひとつの骨箱に入っているものは何であるのか、文郎に強い疑問が湧き始めているらしい。

サンダル之音とともに鈴木さんが戻り、

「やあ、お待たせしました。こんなものしかありません。よろしかったらお使い下さい」

探し出して来た不祝儀用の鈍い若草色の風呂敷を、鈴木さんは文郎に差し出す。そして、

「どうかなさいました？」

文郎の浮かぬ表情を察してのことである。新たな疑問を鈴木さんに問いたただすように、

「この骨箱、軽いですね」

「そうですか、これを持上げてみましたか。見た目より軽いのですが、中には叔父さんの想いが一杯詰まっているようですよ」

鈴木さんは喉まで出掛かりそうになり、なぜか意識的に呑み込んだ。人がいいので、

「やはり、ここで開けてご覧になりますか」

と、黄ばんだ骨箱の布の結び目に手をかける。文郎も自分一人で開けるのも不安だと思つたに違いない。だが、面倒かけるが血のつながった文郎が背負うべき事でもあるのだ。

「いや、いいです。田舎で確認しますので」

説明を受けずに、差し出された風呂敷に包み終えた。文郎が礼を言うと、鈴木さんも立ち上がり、窓口の前に出て、

「もう、田舎は雪で白くなっているでしょうな。私も叔父さんと同郷の生まれなんです」

「えっ、そうだったんですか」

「毎日降り続くあの雪が嫌で、嫌だね。捨てるように、私は逃げて都会に出てきました」

鈴木さんは別れ際になって、北の国を懐かしむように、少し田舎訛りをまじえて、

「ずいぶんど、帰っていないいけどね。もう私の所では拜む墓もなぐなり、そうなるときびしいもんですよ。叔父さんはよがったすな」

その言葉を聞きながら、ずっと厄介者だった俺を、最期にこうして抱いて帰ってくれる文郎に、俺は力の限り骨箱を揺らした。

鈴木さんは俺にそつと手をかけて、

「遠路はるばる、本当にご苦労様です。それじゃ後は、あなたにお願いしましたよ」

と合掌して深々と頭を下げた。

銀杏並木の中、文郎は結局両腕に俺の骨箱を抱く格好となった。何とか雑踏を抜けタクシ―を拾い、上野から新幹線に乗り込んだ。

夢に見た山脈がすでに雪を戴き鎮座する北の町、俺の本籍地の町に着いたのは、すでに本堂の障子が夕陽で染まる時刻であった。

案の定、文郎は俺の仔細を住職に話すことを避けた。読経の後、いざ納骨となり、本堂のほどに俺のふたつの骨箱を移し置いた。

「このまま納骨じゃな、日が暮れるぞ」

住職に催促され、持ち帰った茶封筒を文郎はそのまま手渡した。埋葬許可証を見ながら、

「お仏さんも、長旅をされたものですね」

中を確認すると住職は文郎に、

「もう一通ないのかな？」

「いや、これだけか預かつてきません」

遅ればせながら、軽い骨箱はお骨ではなく、文郎もまだ確かめていないと住職に告げた。

「お骨でないとな。どれ、開けて見なされ」

区役所では開ける勇氣もなかったのに、住職の前、ご本尊の前である。文郎は何も恐れることもないと、黄ばんだ布を解き、現れた白木の蓋を開けた。俺は恥ずかしかった。

中に細かい紙切れを詰めて置いたのだ。何かが隠されていないかと、住職は背後から文郎を急かす。文郎が両手ですくい取るように紙切れを持ち上げて、当然箱の底にはそれ以外収まっているものはない。こぼれ落ちた一片を住職が拾い上げ、朱赤の色を失いかけた表戸の

光に透かせて見つめる。

「うむ……、南無阿弥陀仏」

住職は紙切れを見つめ、言葉を発した。文郎もあらためて紙切れを丁寧に見直す。中の小さな三角形の紙切れ、どれにも「南無阿弥陀仏」の六文字を書き記しておいたのだ。

「ほほう、何と信心深い方ですな。お骨と一緒に納めてあげなされや」

そう言い残し、住職は庫裡へ姿を消した。

文郎はふたつの骨箱を前に座り込み、開けた骨箱を覗き込む。紙切れの意味を解こうとするが、すぐ分つて堪るものか。北の国を捨て、逃げて都会に出た者、たけしか分るまい。だが、どうやら文郎にも俺の血が流れていそうだ。いや、決して俺の子ではないのだが。

蒼黒くなった本堂の天井高く、文郎は俺の紙切れを溢れんばかりすくい、思いつ切り放り上げる。曼荼羅(まんだら)格子の闇の中、俺の想いは天空より花となつて骨箱に舞い降りた。

押入

一尺五寸ほどの隣家との距離、光は真上からしか降りて来ない。ガラス窓の先は、赤錆びた波トタンで視界が遮られている。それは飲み屋の壁だが、継ぎ接ぎしたトタンの腐食が色を重ねた抽象画のようでもある。

光雄が場末のこの木賃アパートに越してきて、まだ一週間も経たない。六帖一間の部屋が月一万円、その安さゆえ決めたのだ。国民年金頼みの年寄りに、なかなか保証人もなく部屋を貸す家主などない。当然、この家賃では台所とトイレは共同だ。ただ、有難いことに風呂場も共同として使える。間口一間半、奥行き二間の部屋は、窓際に一間の押入れが付いている。おそらく隣も位置をずらし、同じように背中合わせに押入れがあるに違いないと、光雄は推測する。

話し相手もまだ出来ず、日がな一日することもない。ステテコ姿で薄汚れた壁にもたれ、押入れをぼんやり眺める。紺地の中帯が入ったどこでも見かける柄、その襖半分が開いた押入れには、上段に一組の蒲団、そして枕。下段には鉛色の柳行李（やなぎこくり）が一つ入っている。柳行李は光雄が故郷を離れた時のものだ。忘れてはならないもう一つ大事なものを置いてある。蒲団の脇、光雄の家内の遺骨と位牌だ。光雄が持ち込んだものはこれだけだ。

若い頃は置き場に困るほど、物に溢れかえった生活をしてきた。歳を取ると共にリストラ流行りとなり、煽（あお）りで事業も思わしくなくなった。一つ年上の家内も亡くなると、剥

ぎ取られるようにその全てを失い、居場所を転々とした挙句の柳行李一つなのだ。蒲団は世話をしてくれた不動産屋の年増の女が、見かねてどこからか持ち込んでくれたものだ。

眠れぬ夜中には隣の部屋からロックというのだろうか、喧しいだけの音が薄い壁を伝い、光雄の部屋で一気に広がる。まだ、数度しか顔を合わせたことはないが、学校にもろくに通っていない、コンビニでアルバイトでもしているフリーターの男だろう。光雄の荷物と比べものにならない程、男の押入れには山と物が詰め込まれ、蒲団の間から洗濯物が臭い、押入れから部屋へと増殖し、溢れかえっているに違いない。男もやがて出来ちゃった結婚でもし、責め立てられるように広い部屋、一軒家へと住み替えを繰り返し返すのだ。溢れかえった生活空間、それでも不確かな満足を追い続け、このように歳を取るのだ。

悔いてもしようがない。今ではこの何もない荒れ野の如き六帖間にさえ、己の居所を探す有り様である。その恐怖にゴキブリの如く怯え、追われ、光雄は闇を求めた。逃げ込む先は押入れしかない。襖を閉め膝小僧を抱えるように縮こまると、意外と今の自分に丁度いい。子供の頃の隠れんぼのようだ。

さらさらした薄つべらなベニヤで囲まれた押入れ。光雄は隣の男の様子を壁越しに伺う。留守らしく物音は聞こえない。ただ、目覚まし時計の音らしきものが、カッチコッチと規則正しく時を刻むのが聞こえる。光雄がとつと捨てた別世界の時を刻む音だ。その音に催眠

を掛けられるよう闇に落ちていった。

一つ押入れの箱舟の中、光雄のその上には先立つた家内が眠る。何処にその骨を埋めようか当てもない。ずっと抱いて転々としたが、光雄の死に場所さえ見つけることができない。やつと陽も差さない部屋に辿り着いたが、荒海か大河なのかを渡り、流れ着く場所はこの先もうただ一つ処しかない。

意識が点滅しかける中、自分を包むこの闇のことを思った。もはや棺の中に違いない。

「そうか、万歳。コロリ往生だ」

この歳で誰か彼かに迷惑をかけてまで生きてゆかねばならぬことに、光雄はずっと気がかりだったのだ。

闇の奥の深い彼方、棺を囲む者たちから、

「お父さん、いつたい何処にいるの！」

娘のような声が、魂を叫ぶ声とする。今さら父親と呼んだとて、お前のしでかした親不孝が帳消しになるものか。「それ見たことか、親が死んでやつと分つただろう」と、光雄はニンマリとした。一方で、この場に及び父さんと叫んでくれる娘がいることに、もう何も言うこともなく、ただ、ただ満足だった。

その娘の声を餞（はなむけ）に、突如まばゆい光の束が降り注ぐ。自分の魂がああ世に、天

上に超音速で駆け上る、召される時が到来なのだと思感した。途端、一塊の雲が黒い影となり、光雄の前に立ち現れる。地獄の閻魔かとも思い、ここで捕まってはならぬと拳を握り身を斜に構えてみせた。閻魔が頭越しに告げる。

「お父さん、ご飯時には呼ばれなくとも自分で降りてきてくれなきゃ困るわよ」

「裕樹だつて、クラブ終えてお腹空かし、じいちゃんのこと待っているんだから」

光雄は再び地上に舞い戻った。場所は厄介になり始めた一人娘の家の六帖、孫と背中合わせ半分の押入れの中である。ガラス窓の向うは、渡りきれなかった深い群青（ぐんじょう）の海色の絵にすでに替え代わっていた。

三角ベースボール

軒先に赤い「アイス」の文字が揺れる。

ゴオンと、銀色の機体が青空を斜めに切り裂いて飛んでいく。東の山並に入道雲が沸き立つ夏休み直前の昼下がりが、小さな駄菓子屋、婆の店つこの前に子供らが群がる。手製のバットを持つ子はいるが、誰一人グローブラしきものを持つてはいない。学帽や麦藁帽で、まだ野球帽を被る子はいない。

子供らはみんな四年生だ。この春、やっとドッチボール遊びを卒業、長嶋に憧れて野球を始めたばかりだ。遅れてきた子を待つて、すぐ近くの神社の境内に移動だ。その仲間から幾分離れて歩く子がいる。みんなから、

「来るな！ 入れないぞ。婆と居ろよ」

それでも恐る恐る付いていく新吉。丸坊主の小ちやな日焼けした体、少し薄汚れたランニングに半スボン姿だ。尻の後ろに婆が新聞紙で拵えたグローブを隠し持つ。わずか後ずさりしてみせるが、それでも鳥居をくぐる。

子供らの野球は、また三角ベース級のレベルだ。柔らかいゴムボールとじゃれ合っている。草むらのホームグラウンド、境内の大きな銀杏の木が一塁、そして左手にある社殿の回廊脇の雪洞(ぼんぼり)が二塁だ。ホームベースは神楽殿の前、その辺から拾ってきた赤く錆びついたブリキ缶のフタだ。ホームベースに集まり、さっそくチーム分けをする。みんなも心得た

もので体格が似たようなもの同士を引つ張り合い、ジャンケンの相手に選ぶ。それぞれ大声を張り上げ、叫びながら、

「ジャンケンポン、あいこでしょ！」

勝ち負けを決める。当然、これで試合の勝敗が決まるわけではない。ジャンケンの勝ち組と負け組で二つのチームに分かれるだけだ。子供らの人数は新吉除きで総勢十人。初めから新吉のジャンケン相手はいない。どこでもそうされたから慣れている。

新吉は背後でぼつり、

「俺は、どっちだ……」

チビの転校生をまだ相手にしたくはないが、

「どっちでもいいから、好きな方でいいぜ」

そこは同級生だ。仕方なく仲間に入れた。

「だけど決して、俺たちの邪魔すんなよ」

とも声が飛ぶ。新吉はうなづき、全力疾走で一塁と二塁ベースの奥の方、参道の石畳の上に陣取った。ここなら友だちの邪魔になるまい。万が一、ボールが飛んできたら、拾ってあげられる位置だと思った。子供らのルールでは、石柱の柵、参道の石畳、そして社殿の回廊は、もうホームランゾーンだ。新吉は外野スタンドの中、まだ、お客さんなのだ。

負け組が守備に着くとゲームが開始だ。

「ピッチャー、第一球投げました！」

杉浦を真似たアンダースロー。自ら実況付で放り投げられる。決してバッターが打ちにくい剛速球など投げてはいけない。すくい上げるようにバットが鋭くボールをとらえた。二塁のデブつちよ平太の股間をすり抜け、社殿の高床の下に転がっていく。これは二塁打と決めている。早速、みんなから声が掛かる。

「おい新吉、もぐつて取つてこい」

新吉は新聞紙グローブを振りあげ、賽銭箱脇から暗い床下にもぐる。クモの巣をかき分け、やつとのことでボールを探しあてる。縁先に頭を出すと、カンカン照りの風景が白む。ボールをピッチャー方向に力一杯放る。ピッチャーの胸元に食い込み、弾んで転げた。

攻守が入れ代わる。みんなは、新吉をボール拾いと初めから決めつけている。一塁、二塁のその後方は、すべてこの小ちゃな新吉の広い守備範囲だ。しかし、本人は大満足だ。

「新吉、そのままでもいいだろう！」

バットを持ち打席に立つチャンスはない。

ヒゲラシが間遠く鳴き、朱色の西日で境内の樹木や社殿が染まる頃、ホームベース上に子供らは円陣を組んだ。キャプテン格の一番のつぼの良一が輪の真ん中に立つ。夏休みが明け

たら、五年に試合を申し込むと宣言する。良一の提案に、みんな拳を振りあげ、

「おー！」

とチームのデビュー戦に歓声を上げた。

「本当の試合だから選手は九人だ。残りの二人は補欠だぞ。文句はないな」

四年だから、守備の人数を甘くしてもらおうわけにもいかないとも言う。もう、新吉の他に補欠となる子は決まっているようだ。輪の中にいる本人もそれに気づいている。その平太は、後で離れて見ている新吉の方を振り向いた。西日の逆光だが、汗だくの顔が少し照れ笑いたような気がした。新吉も下手くそなウイנקを返してみせた。

「明日から猛練習だぞ。みんな集まれよ」

「おー！」

決起の声が婆の店つこまで届く。子供らの様子を、婆は店つこの脇からずっと見続けている。その曲がりかけた影が、土ぼこり道を渡り、青々と波打つ田んぼへと伸びる。

帰り際、婆は平太と新吉に二つくつついたソーダアイスを割り、分けてくれた。二人はそのアイスメドカッチンコした。密かに補欠の最強バッテリーを組もうと指切をした。

雪に眠る

「サスペンス好きには、たまらないわ。紅葉色の晴着の下に、死体が眠るなんて」

と願った女の思い通り、光雄は半年前この雑木林の中に女を埋めた。季節は女を封じ込め、雑木林を辺り一面雪で覆っている。

頭上でカラスが喚き立てる中、光雄は膝までつかりながら雪をこぐ。先に進むほど深く足を取られ、今にも倒れ込みそうである。行く手、広がる雪面には、野うさぎらしい足あとが点々と深緑の杉林に続いていく。雑木林のど真ん中、とうとう前のめりに倒れ込んだ。雪形からやつこのことで身を起こし、

「もう一度、現場に顔を出すというが。これが、それを見越したあいつの復讐劇なのか」

雪の上に尻を落とし、光雄は呟いた。長靴に入り込んだ雪を片足ずつ振るい落とす。厚手の靴下はすでに濡れ、足先は冷たくなっている。長靴は山林の下で借りてきたものだ。やはりこの季節、雑木林に足を踏み入れるべきではなかったと、光雄は後悔している。

女と光雄は、ひよんな事からひとつ屋根の下で暮らし始めた。すでに光雄は家内を亡くし、古稀を前にしていた。女はそれまでどう暮らしてきたのか、一度は結婚したのか、子供があったのか、どんな修羅場をくぐり抜けてきたのか、告白することはなかった。そして、まだ二十歳前だと強情にも言い張っていた。そんなことで、光雄もあえて女の詮索（せんさく）はしなかった。頼れる身寄りのない者同士、二十歳前の女との暮らしはごく自然に始まった。

女との暮らしぶりは、至極穏やかであった。日がな別々に好きなことをし、ともに夕べの晩酌を過ごす。これからのことに想いを馳(は)せ、可笑しく語り合い、盃を重ねた。まるで見知らぬ海外旅行への期待を膨らませ、いろいろな準備をするような楽しい気分でもあった。

あるおぼろ月夜、女がその行き先だけは確認しておかねばと、かぐや姫でもあるまいのに、その時だけは真顔だった。その行き先とは、死んだ時の自分たちの遺骨をどう処理しようかという唐突な話だった。女にすればその時の事ぐらいいは、思い通りにしたいと言う。自分で話を持ち掛けておきながら、女は至極簡単に光雄へ命令した。

「少しずつ、ゴミに出して貰えばいいわ」と言う女の話に、

「いくら何でも、それは困るぞ」

光雄はそれだけは拒否した。女はいつも極端過ぎた。そればかりは、命令と言われてもしかねると拒んだ。女は死んだ後のことは、あまりあれこれ執着しない性格でもあった。また、それがあの女らしかった。

ボケ防止にと習い始めたインターネットで、光雄は早速検索してみた。葬送というキーワードを入力しただけで、何と何万というホームページに行き当たった。みんな行き着く先は決まっているからだ。主に葬儀の値段や葬送のあり方に関するものが多く、それも今日的だった。女が言うように、ゴミに出すことは出来そうもないが、海、山、空へ葬る葬送の自由が、

検索からしばしば字面としてチェックされました。

それ以来、女は葬送のことは一言も口に出さなくなつた。というのは、女は新たな鋭氣を得たようで、見た目より血氣盛んだつたのだ。今、行くしかないと言ひ出し、スペインと中国旅行、拳句の果ては、

「どうも、言葉が好きになれないな―」

と言つていた韓国まで、出掛ける忙しさが女に続いたのである。女の懐具合を光雄は知るよしもなかつたが、それをむざむざ残して死んでは、死ね切れないとも女は言つた。

互いに一切金銭的面倒を掛けないというのが、女との暮らしのルールでもあつた。光雄の頼りは少ない年金だ。物書きと言へるほどでもなく、忘れた頃に入つてくるの原稿料、シルバー人材センターへの登録による、公園の草むしりなどが光雄の生計のすべてだ。毎日の食卓の費用こそは曖昧であつたが、決して女の蓄財に甘えて旅行に便乗することはしなかつた。こんな中、光雄にとつて女との過ぎゆく時は質素だが、残り少ない時間を十分惜しむかのよう、ゆつくりゆつくりと暮れていつた。

昨年の十五夜の晩、女が忘れかけていた、いや、棚上げにしていた葬送の事を、どこで誰に聞いてきたのか、光雄に宣言してきた。

「私、樹木葬がいいわ。それで決まり」

「そうしてね、お願いよ」

あまりにも女の唐突な決定だったが、おだやかな山や川に囲まれた近くの街で、樹木葬というものを始めた寺があると言う。

女の希望で日数も置かず、二人してその下見へ山が紅葉色に燃える頃に出掛けた。埋葬地は管理する寺から光雄の足でゆくり歩いて十五分ほど、山合いに入った小高い処であった。雑木林のその道すがらに紫陽花が植えられ、夏には紫陽花の小径として散策路にもなるらしかった。埋葬地は雑木林の中に、低木のサツキが点々と生えているだけであった。それと知らなければ、幾分手入れの行き届いた裏山といった風なものだ。

そこで女は、周りの紅葉色に溶け込むような頬をして、

「ここなら許せるわ。いいでしょ」

女の言う通り、極彩色の葉陰から木漏れ日が差し込み、人生の終章にふさわしい彩りと気高さ、加えて何よりもそこには静けさがあった。女はここなら惑わされず落ち着いて、これら極彩色の落葉と一緒に朽ち、ゆつくり、じつくりと大地に染み込んでゆけると確信したらしい。そして、光雄にせがむかのように女は瞼を細め、

「あなたの手で、私を埋めてちょうだい」

「ダメ！ 間違わないで。死んだらよ」

とも、ミステリー風にふざけて見せた。

寺の話では、三十三回忌の弔い上げを終えれば、また幾分手を入れて別の方々の埋葬地と

して改葬することだ。確かに、その年数を経る頃ともなれば、光雄はもちろん訪れて拝む者さえいなくなる。やつと土に還りその一部となって、草木茂る雑木林に生まれ変われるのだと、女は思いを強くした。

だが、命というものは不可思議なものである。女はそれからひと冬も越し終えぬまま、女の誕生日の二月末間際になって、眠る地を決めて安心したように、女は矢庭に逝ってしまった。女らしく全部処分して、何も残さず、約束通り樹木葬への費用だけを託して、光雄との短い暮らしを終えたのであった。

女の命日が今日なのである。光雄がこぐ雪の原、ずっと先に女が眠っているのだ。

「場所は申し分ないが、死ぬ季節だけは選べなかつたのかな。準備のいいあいつでも」

行く手を阻まれ、ぼやきも出る。幾本かの木立を抜けて、やつとこのことで南斜面の埋葬場所に辿り着いた。この季節、見定められるのは、側にある力エデの木の位置くらいなものだ。目印に植えたサツキも、未だ深い雪の下である。ただわずか、雪面にエクボらしきものが見てとれる。きつと、女が光雄への目印としてつけてくれたに違いない。

小さなエクボを前に、光雄はどつかと腰を下ろす。黒の手袋を取り、素手で少し表面が堅くなった雪をすくい取る。中ほどは幾分ふんわりしている。それを、きゅつ、きゅつと押し固め、二つの雪玉を拵えた。エクボの前にそれを重ね置き、防寒着のポケットから南天の赤

い実を取り出し、眼の代わりにと埋め込んでやる。口の代わりにと、側の細い枝も少しだけ折り曲げ、微笑んでいるような雪ダルマが完成する。冷たくなった手に息を吹きかけ、やがて光雄は手を合わせた。

「ゴメンな。お詫びだよ」

光雄を少し春めいてきた午後の木漏れ日が包み込んでいる。雪ダルマは、実は女との出来事の始まりだ。あの出来事がなければ、二人の運命は変わっていた。いや、変わらなかったかもしれない。

それは遠く、小学校六年の早春まで遡る。女が放課後の窓辺で、何を思っていたのか一人外を眺めていた。少しでも胸が膨らみ始めた女の緑色のセーターが、光雄には殊更（ことさら）まぶしかった。それを後ろから脅かそうとした。驚いて振り返った女の手元、二階の窓辺の縁に置いてあった小さな雪ダルマがその拍子に落下し、軒下の玉石で四方に碎け散った。二人でその飛び散った姿を見下ろしたが、その時、光雄はゴメンの言葉しか掛けてやれなかった。女は今にも泣き出しそうになり、怖い顔をして教室を出ていった。それ以来、中学校、同じ高校に進学しても、女は光雄とまともな口をきくことはなかった。

何十年ぶりのかの同級会、光雄がそのことを女に詫びたのが、女との暮らしのきつかけだった。女に光雄がああ時の雪ダルマのことを話しても、

「そんなことあつたづけ。てつきり、光雄君に嫌われたんだわ、と思つたわ」

と言つて退けた。女の心遣いもあり、ずっと光雄が抱いていたわだかまりが解け、子供の頃、机を並べ遊んだように、一緒に暮らし始めたということだ。

女はこうも言つた。

「光雄君は会わぬ間に、もう、おじいさんだけど、私はその四分の一しか歳を重ねていないの。その意味つて分る？」

女は、閏年の二月の二十九日生まれだった。誕生日は四年に一度しかやってこないと、それが女の若さの、年齢の秘密だった。

光雄の背後、木立に沿うように曲がりくねつた足あとがここまで、ずっと続いている。光雄がつけた雪あとである。再び一人となつた今は、もう一度、この雪あとを頼りに、雑木林から這い出るしか手立てがない。

この雪の雑木林への墓参は、女がとつくに忘れたと言つた退けた、あの時の雪ダルマへの手痛い仕打ちとも光雄には思えた。

銀杏

銀杏(いちよう)の葉が落ちきる頃、「サメが死んだらしい」と、子供たちの間で噂が広まった。それはもうとつくに忘れかけた頃の話だ。だが、今ではどうでもいいようなことが、何の前触れもなく、ちよつとした拍子に記憶が止めどもなく噴き出すことがある。

勤め先の大学に向かうバスの中、昭二は車内までも一つ色に染め込む銀杏並木を眺めている。ハラハラとその根元に幾重にも色を散らし、昭二の丸縁眼鏡にも映り込む。そんな光景が小学校の頃のある出来事を想い起させた。瞬時にスイッチが入つてしまうと、矢継ぎ早に四十年前前のことが銀杏の色とだぶつて立ち現れる。もう目頭が熱くなっている。

今となつては懐かしい木造校舎の二階、五年の教室。帰り際なのに、何か言い合いがされている。教室と廊下を仕切るガラス窓の隙間から覗く。女子が立つて泣きべそをかいている。あつ、あれは多恵子だ。学校の近くの駐在所の娘だ。春に四キロほど離れた町場から転校してきたが、何かと様子が違う在の学校で衝突が多い。ましてや一組だけの学年、子供たちは入学の時からずつと一緒で、よそ者に対して最初は何かと冷たくあたる。後の席から意見が出される。大司だ。でつぶりした巨漢で、土建屋のせがれだ。

「多恵子、弁当と一緒にリングゴを持つてきていいのか。遠足でもないのにさ」

何と、デザート代わりのリングゴを持つて来たことが、学級の問題となった。今思えば、在の子供にデザートなどという知識もなく、習慣もない。アルミ弁当箱にご飯、タマゴ焼、塩

引、梅干がいい方だ。中には、納豆をおかずに入れてくる子もいた。薪ストーブの上の鉄力
ゴに並べて弁当を温めていると、たくあんと納豆だけは異様に教室中臭ったものだ。

もう一人、窓際後方から声があがる。

「そうだそうだ、巡査の子なのに悪いことするなじゃ」

隆の声だ。その声に合わせて、悪者扱いする視線が多恵子に向けられる。多恵子にとっては、
ごく当たり前のことで、同級生にやり玉にされるとは思ってもみなかったことだろう。黙
って見ていた山田先生が教壇の前に立ち、子供たちのやりとりに割って入る。

「多恵子さん、みんなと合わせるように気をつけなさい。それでは今日はお終いです」
とデザートの意味の説明もない。貧しい時代の子供たちに説明しても仕様がなすが、山田
先生も今年赴任したばかりのよそ者、多恵子の味方ばかりは出来なかつた。

帰りの掃除が終わっても、一人教室に多恵子は残っていた。校舎裏の外掃除当番を終え、
大司、稔、良一と共に教室に戻った。みんなさつきのことであつたと気まづいが、大司だけ
は平然として、チビの捻に耳打ちをする。

「多恵子の弁当袋、隠せ」

背後から多恵子に気付かれぬよう、机の上に赤いランドセルと一緒に置かれた弁当袋を
引抜き、廊下に走り出す。みんなランドセルを抱え、西陽で黄ばみ出した廊下を走る。

「何するのよ、返してよ」

また泣きそうになりながら、多恵子は追いかけてくる。階段の降り口で、やいやい囁し立てる。本当のこと、男子はみんな多恵子のが好きなのだ。自分だって誰にも言わないがそうだ。町場育ちの多恵子は、色白でちよつと鼻がつんとして勝ち気だが、誰にでも臆せず話かけてきた。着てくる服が小綺麗で、脇をすれ違っただけでいい香りがした。

泣きべその反面、男子たちをどこまでも追いかける強さが多恵子にはある。だから余計、男子たちは戯れ、遊ぶように意地悪を楽しんだ。ずっと一緒にいたかった。けれど、多恵子がまた泣くのを見たくもない。様子を見はからい昇降口のスノコに弁当袋を置き、一斉に校舎の影がのびた校庭へ飛び出す。

大司は、一緒の三人に向かって命令する。

「もう少し遊ぶべ。土俵場へいくぞ」

校舎の北側、町の守護神の白山神社に挟まれて土俵場がある。大司は組で東の横綱だ。西の横綱は隆だ。秋祭りの奉納で、大司と隆の東西横綱対決があつた。大司は隆に際どくも敗れ、その鼻柱を折られ面目を失っている。

「隆なんか何だつてや。良一來い」

ひよろつとしたもやしの良一を捕まえ、大司は得意になつて稽古をつける。稔と同様早く家に帰つて、借りてきた漫画本を見たい。空は夕焼けだが、でも大司は帰してくれない。

帰ろうと言いつ出そうとする時、土俵場の近く、小さな家の灯りが点いた。大司が言う。

「サメ、来ているじゃ」

神社の杉木立の背後に、鬱蒼(うつそう)とした庭木に囲まれた謎めいた黒い家があった。

悪霊がついているような重苦しい気配がし、子供たちもずっと気にかかっていた。

「ちよつと、覗いてくるべ」

大司が無理矢理に稔を引きづり、一つ灯りがともる窓辺に腰をかがめて近寄った。

窓の上、影二つとなった頭を出すやいなや、

「サメだ、サメだ」

とはやし立て、矢庭に引き返してきた。

サメさんのことは、町中誰もが覚えていた。夏、冬に限らず綿入れを重ね着して、もつこりし、髪も梳かさずバサバサさせ、樽では風呂にも入ったことがないという。だから、いつも町中の者は、国道を独り言を喋りながらぼそぼそ歩くサメさんを避けた。子供たちは家影に隠れ、通り過ぎると背後から、

「臭せ、臭せ、サメ臭せ」

と囃し立てもした。サメさんは追い払う真似事をするだけで、またぼそぼそと行つてしまふ。よくこの時分、町を南北に突つ切る国道を歩く、行き交う物売りや祈祷師、物貰いなど、行商や放浪する者がまだまだいた。

木枯らしがやってくる前、小春日和を見はからい、学校総出で薪運びがあった。両腕で薪を抱きかかえ、軒下で待つ先生まで往復する。すれ違う大司は、汗だくで赤顔になっている。力持ちだが歩くことは苦手だ。

「昭二、サメのどこさ行くべ」

とまるで肝だめしのように誘う。大司に命令されると、嫌とは言えない。薪運びの列からこっそり離れ、土俵場近くの例の黒い家に連れていかれた。

「今日はいねのがな」

逃げ出したいが首根っこをつかまれ、学帽を前後反対にかぶって窓を覗く。中には誰の人影もなかった。大司は不審がり少し氣勢をそがれ残念がつてみせた。神社の銀杏が緑色から黄色に変わろうとしていた。

学校の冬支度が済む頃、銀杏がまっ黄色に変わった。だが子供たちは、この頃になるとウソの匂いがするこの銀杏には近づかない。

ある日の帰り際、もっこりしたサメさんらしき姿が、その銀杏の下で何かを拾っているのが見えた。おそらく実を拾って食べるのだらうと思つた。あのウソ臭い実がうまいのかと。そのことは誰にも教えなかった。

そんな事があつてから何日か過ぎていた。

「サメが死んだらしい」

と子供たちの間で噂が一気に広まった。話によると、サメさんは冷たくなった北上川で体を洗い、身綺麗にし、そのまま流れに入ってしまった。おそらく自殺らしいと。死際に正気が戻ったのだと言う大人たちもいた。そんなことで、子供たちがずっと抱いていた怖いもの見たさの魔法も一瞬に解けてしまった。

それから数日後の昼休み、いつもの連中で、すでに葉を失つて樹形をあらわにした銀杏の下にいた。黄色が重なり合つた模様にみんなが惹かれた。あの匂いも疎まず、ふかふかのまあるい黄色の輪に入つて遊んだ。

大司がニヤリしてまた誘う。

「もうサメ、死んだから怖くねべ」

あの黒い家に行こうと言う。別にサメさんがいないのなら怖くもない、神社の杉木立を突っ切つて大治の後についていった。

葉が落ちてしまったせいとか、黒い家のまわりはだいぶ明るい。いつもの窓に二人で近寄る。

四つの眼で中を覗き込んだ。

不思議だった。部屋中一杯落葉が散らばっている。脇でちんぷんかんぷんそうな大司だが、意外にも口を開けたまま見入っている。

「うわー、きれいだなあ」

と大司に似合わない言葉を洩らす。本当に綺麗だ。きつとサメさんが拾ってきた落葉だ。でも、なぜこんなに落葉を部屋中敷きつめたのだろう。赤いもみじに混じってあの銀杏の葉も見え隠れする。サメさんは死ぬ前、寒さしのぎに落葉の布団にくるまり寝ていたのか。それとも、秋が燃えるかのような山色のべべを着たかつたのかと思つた。

先生の集合の笛が鳴る。木枯らしが落葉を巻き込み、校庭を駆け抜け始めている。汗の後の冷たさに堪らず大司と腕を組み、尻を向けあい押しくら饅頭の真似をする。近くにいた隼も良一も、多恵子も組のみんなが駆け寄り、押しくら饅頭に加わつた。

「押しくら饅頭、押されて泣くな」

みんなふざけながら笑い、体を寄せ合い、もみ合いながら、一緒に暖まろうとする。

見上げる天空、何やら雪虫のようなものが灰色の中から湧きだしてくる。大司が叫ぶ。

「あつ、雪降つてきたぞ」

今年初めての雪だ。みんな口を大きく開け、その雪を受けようとしている。その都度、子供たちの輪はあつちへ、こつちにと動いた。

車窓の外の銀杏には、まだ青いものが混じる。昭二が大人になつてから分かつたのだが、なぜか初雪がやってくるのは、銀杏の葉が落ちてしまった頃だ。足踏みする今年の晩秋の様

子だと、雪はまだらしい。初雪には、あのサメさんがこの地上に舞い降りるのだろうか。

「寒め、寒め、寒め」

といっぱい綿入れを着込んでこの町を、昭二の育ったあの里を、綿菓子のようにふんわり包んでくれる日も程遠くない。

葬送

頭上から叫び声がした。

「ふつみー、絶対引き返してはダメだぞー」

と文助さんの声だと思った。でも、そんなはずはない。確か、文助さんは肝臓が思わしくなくて入院中なはずだ。

「順番違うなよ。本家しつかりどしろ」

またもや叫び声がある。今度は本家・橋元の秀造さんに向かって怒鳴る声がした。いやいや、橋元の秀造さんも足腰がめつきり弱って、家で寝浸りだそうだと、家ですると、

「まずまず、あんまり騒わがねでよー」

険悪となりつつあるこの場を鎮める茂雄さんの声も出た。茂雄さんは一昨年に死んで、去年の春彼岸に一回忌の法事を済ませたばかりだ。

実家の前と後にあたる文助さんや茂雄さんのこんな幻聴を耳にしながら、文雄は燈籠を手先に先頭に立っている。笹竹に麻ひもで吊された紙の燈籠に、もはや蝟燭(ろうそく)はなく形だけの死出の道を照らす燈籠だ。

船橋の庄蔵さんの葬送が出発するところだ。船橋は部落のほぼ真ん中に位置し、行山流鹿踊り一派の庭もとでもある。エグネという屋敷林に囲まれ、今では農機具置き場となってい

る長屋門の内側、庭先で黒ずくめの葬列が組まれようとしている。笹竹でコの字形に拵えられた門の手前、文雄は樋ノ口の竹夫さんと立っている。文雄のうしろには賑々しく、日天月天、男龍女龍、旗を持つ部落の人たちが続いている。ひと昔は「為知(しらせ)」、つまり葬式へのご案内がない部落の人たちが、お手伝いと称して墓の穴掘りや葬送の手伝いをした。もちろん、いくばくかの米も部落中から集めた。また、講中という言葉が生きていた頃だ。

今では「為知」を受けた人たちが、手分けして葬送の役割を受け持つ。いつもながら、この葬列の順番で話が採める。特に、葬式を差配する年寄りがいないせいか、なかなか今日の葬列の支度が整わない。

整わないことを良いことにして、葬式と思えぬほど賑やかで、笑い声も絶えない。それは、八十を越した庄蔵さんの葬式だと、皆が思っているからだ。どこか葬式の重苦しさがない。第一、喪主の亮さんが、その巨体であつちこつちと動き回り、自らあれこれと指図(さしず)する有り様だ。

それを見かねてか、

「橋元、しつかりどせ」

周りから呆れてヤジが飛ぶ。本家である橋元の秀造さんの息子、文雄より年下の信用金庫に勤める秀雄君がおろおろする。庄蔵さんと秀造さんの家は隣同士だ。互いに本家と呼び合いい、こうした冠婚葬祭の時は本家になったり、分家になったりする都合のいい関係だ。

数年前、秀造さんの奥方が死んだ時は、亮さんが本家としての差配(さはい)をした。今日と同じようにあっちこっち動きまわっていた。寺での焼香では、足をしびれさせ多くの会葬者の前で、すつ転びもした。

これを人徳と言うのだろうか、葬送とは思えぬ、何やらみんなしてこれからさなぶりの骨休めの温泉にでも繰り出すような雰囲気でもある。

四花、松明、一杯飯、遺影と持つ人が割り当てられていく。当然ながらこれらは近親者となる。位牌は喪主の亮さん。遺骨は庄蔵さんの甥っ子だ。この土地では、甥っ子がいる場合は遺骨を持つ役割が命ぜられる。文雄もかつて伯母と叔母、二度遺骨持ちをさせられた。何とも奇妙で、故人になったような気がしたものだ。

その遺骨持ちに続き、命綱という白い布にしがみつくように、白い布切れを被った喪服姿のおなごたちが連なる。近親者の男たちはヒタイガミを頭につけるが、葬儀屋によつて白い布を肩に掛ける場合がある。今日は布を三角にして掛けている。

再度庭先で、指差して亮さんがその葬列の確認をする。

「さあ、出発だぞー」

喪主自身が号令をかける。何とも奇妙な葬送の出発となった。おそらく亮さん自身、寝込んでいた父親の介護から解放され、無事あの世に送り出すことができるという開放感もあるのだ。

新家の保夫さんの、

「ゆっくり、ゆっくりどたどー」

との声に後押しされ、竹夫さんと文雄が持つ燈籠を先頭に、葬列がやつと動き出した。これも部落の人が持つ笹竹の門の手前、地べたに広げられた庄蔵さんが着た浴衣を、土足のまま踏み、門をくぐる。

また、保夫さんの声が背後から掛かる。

「ゆっくり、ゆっくりどたどー、急くな」

その度に笑い声が起こる。

葬送と言っても、わずか数メートル先の長屋門をくぐってしまえば、ひとまずお終いだ。広い庭のない処では、並ぶ真似事をするだけで終わってしまう。長屋門の前には、すでに二台のマイクロバスが待ち構えているのだ。

長屋門を抜けると、葬列の見送りに集まった部落の人から、

「昔、野辺送りと云えば、お寺まで歩いたものだもな」

と解説が入る。その通りだ。ひと昔前までは、家を出た葬列は寺までこうして歩いたものだ。三十年前に早死にした文雄の父親の時も寺まで歩いた。喪主は草鞋(わらじ)履きと決まっていた。冬でさえもである。草鞋は寺の近くで脱ぎ捨てられた。その草鞋を手に入れると、運がつくとも言われ、ザッコ釣り人が争って奪い合いをしたとも言つう。

父親の葬送の時、出がけに文助さんが怒鳴った「絶対引き返してはダメだぞー」の聲が、今も文雄の頭に焼き付いている。葬列を離れて引き返すと、不幸が重なるという。死出の旅立ちは、決して後戻り出来ない、させてはいけないのだそうだ。死者が別の者を引き連れていくからであろう。

長屋門の前に停車しているマイクロバスの周りで、また一悶着（もんちやく）が始まる。

「今度はお寺に着いてから、並びやすいようにだぞー」

「降りる順番考えて乗れよー」

「前からか、後から座るのか」

寺に到着してから山門の前で、また葬列を組み直すのだ。その葬列を今から組みやすいようにマイクロバスに乗れと言うのだ。何しろ船頭が多い。確固たる司令塔もなく、みんな好き勝手なことを言っているのだ。

当然、先頭の竹夫さんと文雄は最初に降りる。結果として、最後に乗ることになった。

座席に着くと、ホントに温泉に出掛ける御一行様のようだ。

また、亮さんが車掌のように、

「みんな乗ったがー」

の掛声に、ドアは締められた。

二台のマイクロバスに分乗した庄蔵さんの葬列は、ひとまず車中でぐちゃぐちゃになった。

細く曲がりくねった道を、こうして賑やかに本郷部落を後にした。

本郷部落は、文雄がまだ実家にいた頃、三十戸あまりだった。昔から続く家が多かった。今では道路沿いに小宅地が出現し、その戸数は三倍ほどに膨れあがった。しかし、昔で言う講中のな部落の集まりに加わっているところは、戸数のほどではない。

こんな部落に、昨日、今日と葬式が立て続くことになった。参列者の中には、二日続けての「為知」の人も多い。橋元の秀雄君もそうだ。昨日は岩の目の正男さん。そして、今日はその正男さんと同級だと言う八十六歳の庄蔵さんだ。一日違いで死んだ部落の重鎮とも言える二人の葬式が重なったのだ。おそらく今までなかったことだろう。

庄蔵さんの葬送が始まる一時間ほど前、文雄は本家筋にあたる庄蔵さんの家に来た。この家の座敷に上がるのは、庄蔵さんの母親、つまりおばあさんが死んだ時だから、もう三十年前のことだ。あの時の帰り際、土砂降りとなった雨に難儀したことを覚えている。

喪主の亮さんは、座敷にどつかと座っているでもなく、せわしなく準備に忙しい。まるで農作業の時と変わらない。きつと年寄りがいれば、

「喪主は黙ってすわっているのよー」

と諭(さと)されるところだ。だが今日は、それを諭す文助さんも秀造さんもない。おなごたちは、着替えにこれも忙しい。

そんながらんとした座敷で、文雄は竹夫さんと二人して座っていた。花々で飾られた祭壇の庄蔵さんの遺影は、どこかよそよそしく似ていない。焼香した誰かも、

「似てないものな―」

と言った。今流行りだろうか、遺影の後から光があたり、やけに神々しくも見えた。

手持ちぶさたにしていると、ずいぶん早く、

「和尚さん来たぞ―」

の声が掛かった。だが座敷には、祭壇の前に人はなかなか集まってこない。若住職が用意された席に着いてから、揃う有り様だ。思ったより早く来た和尚に、肩すかしを喰らったようなものだ。若住職も予定があるのだろう。

この土地では、火葬を終えてから葬儀となる。土葬をしていた頃の出棺の名残でもあるが、火葬への出棺時と葬儀へ出発する時、両方読経をあげてもらおう。

文雄の後に座った竹夫さんが、

「位牌の文字、なんぼある」

としきりに文雄の肩を突つつく。目が良くない文雄には、その字数が確かでない。竹夫さんは戒名が気になっているらしかった。

竹夫さんは庄蔵さんの隣組だ。やはり庄蔵さんと同年配だが、数年前に奥方に先立たれたから独り暮らしが続いている。ずいぶん背が高いと思っていたが、今では腰もだいぶ曲がり昔

の面影がない。

影では拓志さんが、

「竹夫さん、少しポケだもやー」

と言つてもいる。それを文雄が母親に話すると、

「この年で少しぐらいポケてもしょうがねーべ。寝浸りになるよりいがべ」

母親のごもつともな返答である。

本来ならばこの席で和尚は、位牌と卒塔婆(そとうば)に故人の戒名をしたためる。だが、もう準備がされていたところを見ると、若住職はまだそうしたことを親である住職から任されていなのか。戒名料となる寺への布施の金額は、事前に申告、いや申し出済みのことだ。

読経の後、亮さんから差し出される。お盆には山盛りされた米の上に布施の袋が載せてある。申し出済みの金額なはずだ。米は何となく昔の名残で、布施袋の存在を薄める小道具でしかないようだ。

亮さんがうしろに指図する。

「米っこ入れる袋持つてこい」

何と、ビニールの買物袋が手渡された。全く持つて不釣り合いのものだ。

すかさず文雄のうしろの方から、

「何だつてや」

と溜息が漏れてくる。飾りとしか米は思われていない証拠だ。住職だとすれば、きつと嫌みの一言ぐらいは出るはずだ。若住職はそこまで、まだ押しがきくほどでもない。

亮さんと秀雄君が袋に移そうと難儀しているのを見て、手伝おうと文雄はすぐ立った。みんなの前、三人でこぼさぬよう注いだ。それを待つて、若住職は茶をすすり、米と布施袋を驚づかみにするように、早々と縁側から立ち帰ったのだ。それから始まった葬列だ。

マイクロバスは広い道路に出る。ひと昔前まで「死の四号線」と呼ばれていた道路だ。今はバイパスが出来て県道に格下げになった。

文雄の実家の前を通過する。実家には九十一になろうとする母親が独り暮している。本郷部落で最長老となった。文雄は末っ子ながら、この母親の代理で葬式に出ているのだ。

文雄の母親は出がけに言った。

「正男さんはいい死に方したな」

「正男さんが死ぬ一週間ほど前に顔を出し、

おばあさん、風邪引くなよ」

と言い残して行ったとも言う。

「きつと、別れの挨拶に寄ったのだろうよ」

元氣だった正男さんの話を文雄にした。

文雄も歳の暮れに正男さんと駅でばったり会った。久しぶりだったので、

「おじさん、いつまでも元気でいろよ」

手を握って別れたが、その日も正男さんは、わざわざ一つ手前の停留所でバスを降り、文雄の母親に、文雄と偶然会ったこと、声を掛けてもらったことを伝えに寄ったそうだった。

「年寄、そうして声を掛けてもらうのが、嬉しいのよ」

と文雄の母親も正男さんに代わって教えてくれたばかりだった。

庄蔵さんは、七年前に脑梗塞で倒れた。退院後、懸命に農機具をいじる姿があったが、その後入退院を繰り返した。最後は敬寿園という特別養護老人ホームに入った。

正男さんと会った歳の暮れ、

「本家の庄蔵さん、そろそろらしい」

と文雄が母親から話を聞いた。何事もなく年を越し、春彼岸も越えた。しかし、正男さんが慌ただしく死んだ翌日に、まるで後を追いかけるように庄蔵さんも死んだのだ。

文雄の母親は、出来れば正男さんのような死に方をしたいと、きつと願っているはずだ。

寝浸りにだけはなりたくないとも思っている。もう、自分では旅支度を整えているのだ。

「このバス、お寺に入れるべが」

隣の席の竹夫さんが心配そうに言う。文雄も石の門柱が狭いような気もした。だが、そん

な心配をよそに、マイクロバスは寺の門前の広場に突々着いた。

また誰かが叫ぶ。

「順番だぞ。順番に降りろよー」

まるで「死ぬのは歳の順番にだぞー」と言っているようだ。だが、こればかりはどうにもならない。文雄の母親の後は、歯が抜けたように溝が開きつつあるのだ。

沢水がごうごうと流れる橋のたもと、葬列はその列を再び組み整える。また、笹竹の門をくぐり、橋を渡り、そして山門をくぐる。

またもや背後から保夫さんが、

「ゆつくりだぞ、ゆつくりだぞー」

と叫ぶ。大イチョウの脇を抜け、本堂の前に出る。前庭に白い輪がある。

「燈籠はそのまま回るんだぞー」

「日天月天、男龍女龍、旗は回らないぞー」

後から指図が飛ぶ。

ゆつくり、ゆつくり、一杯飯、遺影、位牌、遺骨に続く白い命綱を握ったおなごたちが輪に入ってくる。それを確かめて二周目に入る。まるで抜け出すことが出来ない輪廻の輪に迷い込むかのような。昔ならば、この輪を参列者が周りで出迎えましたが、今ではすでに本堂で待機するようになった。

二周して竹夫さんと文雄は、輪を輪切りにするように本堂前の賽銭箱に逸れ、向かった。限らない輪廻から抜け出すようだ。これで庄蔵さんの葬列はお終いだ。

文雄は竹夫さんの燈籠も預かろうと手を差し延べた。文雄の倍ほど太い竹夫さんの指先は、黄色くひび割れ、皺だらけだった。後で聞いたら病氣の一種だと言う。何せ婿としてがむしゃらに働いた松夫さんの手だった。

竹夫さんの手を見て文雄は、

「竹夫さん、お袋の先に決して逝つてはダメだぞ。順番なんだからな」

と言い含め、分厚くガサガサした竹夫さんの手を、指を握りしめてみた。

文雄は本堂の祭壇脇にそつと燈籠を置いた。すでに参列者が席に着いている。

その中から話が漏れてくる。

「代替わりしてどこの誰だか分らねもなー」

「今の、にしからつこのふつみちゃんだべ」

と文雄を指して誰かの声もした。

にしからつことは文雄の実家の屋号だ。周りの家はかなり代替わりしているが、いまだ年
老いた母親が世帯主として残っているせいか、まだ地域の中で忘れられることなく、受け入
れられ、見守り続けられているのだ。

「ああ、間違いなくこの本郷部落が、母親の居場所、死に場所なのだ」

と文雄は改めて感じた。

また本堂の表に戻る。その縁先で、拓志さんたちが日天月天、男龍女龍、旗を笹竹からはずし、箱に仕舞い込もうとしている。黒いつづらのようなこの箱が、今度開くのは誰の葬列の時だろうと、文雄は密かに思った。

また、文助さんの声がした。

「順番間違うなよー」

今度は文助さん、秀造さん、竹夫さん、それとも文雄の母親であろうか。

島影

母の骨壺を抱き先頭を歩く。

決して軽くはない骨壺のせいか、早く辿り着きたい一心でどうしても足早になる。行く手真正面に奥羽の山脈が、きりりと立ち現われる。残雪を一面に戴き、いつもより近くに感じる。

思えば、彼岸へと渡ってしまった家人たちと共に、この青い山脈はずっと家族を見下ろし、見守り続けてきたのであろうか。この地で生れ落ちた私が小さい頃から飽くなく仰ぎ見てきたように。きつと父も夢見て、母も見たに違いない旅路の果ての青い山脈。その遙か手前で父母の家族の旅が、今終わろうとしている。

妻の久美子が背後から、

「だから言ったでしょ。明子義姉さんの車で来れば良かったのに」

言われるまでもなく、この際だから寺まで歩こうと言い出したのは私だ。おそらくこうしてこの道を歩くことは、二度となかろうと思つてのことだった。

「義姉さんたちも大変そうよ」

付き合わされた姉たちは、何かを話ながら私たちの後を付いてくるが、その距離はしだいに広がる。

妻は私が立つ位置に追いついた。妻自身の息切れをおさめるためにも、少しここで来るの

を待とうよと言う。生家と寺を結ぶ一キロほどの道のり、東北線に架かる浅緑色したトラスの跨線橋のたもとで、私と妻は姉たちを待つことにした。

なだらかな勾配が続くその中腹を、春陽を受けながら二つの黒い影となつて姉たちがゆつくり、ゆつくりと歩いて来る。その向うには白く照り輝く北上川に、弧を描きながら跨ぐ新幹線の鉄橋が架かる。手前右手には生家のある、いや先頃まであつたと言う方が正しいかも知れないが、集落をここからだとはぼ一望出来もする。

「切り始めたみたいね。あなた、本当のこと勿体ないでしょ。あの木」

新聞紙に包んだ切り花を抱え、妻が空いた左手で指差した。その集落の中で一際大きいエグネに囲まれ、緑なす島影のように見えるのが生家だ。屋敷内の防風林のことをこの土地では、エグネとかイグネと呼ぶ。生家の建物もなくなつてしまつた屋敷で、残るエグネの伐採を始める立ち会いを、つい先ほどしてきたばかりだ。

よくこの春先には、家を建てるため夏場の普請に向けて、北と西側に屋敷を囲むように育てられた木を切り倒した。エグネは防風林の役割をしながら、大きくなると建築用材となつた。木が大きく育つ歳月と家を普請する歳月がほぼ呼応もした。春先から夏秋を越し雪がやつて来る間際まで、およそ一年がかりでの普請がどこでも当たり前であつた。それは家を預かり、守る、男一生に一度あるかないかの大事事であつた。大家族時代の頃のことだ。

生家は昔ながらの茅葺きの建物であつた。終戦とともに鎌倉から戻つた父母は、いつか新

しい家に建替えることを夢にしていた。数多い子供たちの上の方は堅実に勤め人に、下の方は手に職のある大工や左官にさせたかった。自分たちの家を最小の掛かりで建替えることをもくろんだのだ。だが、一番末の私が中学校に上がる頃、東京オリンピックが開かれる頃には、職人のなり手はめつきり減っていた。皆が高校に進学する時代になってしまっていた。何も悩み、迷うことなく、二人の姉たちが通った普通高校に進学した。

今、エグネの中でも一番枝を大きく広げる樫の大木を切り倒す作業が始まったらしい。生家は江戸の末に建てられ、およそ百五十年程になる。その当時に植えられた樫だとすると、少なくとも百五十年の樹齢を刻んできたことになる。

「やはり、若いあんたたちには、付いてゆけないな」

やっと二人の姉たちが、私たちの位置まで辿り着いた。少し伸びをするように腰に手を置いた上の姉、長女の多恵は私と親子ぐらいの歳の差がある。今年で七十五になるが、最近まで若い時から乗っていた車を、「もう危ないから」と、一人息子に言われて免許を返上して間もない。だいぶ遅くに車の免許を取った三女の明子は、私が小学校に上がった時に六年生で、一年だけ一緒に学校に通った。上の姉が運転をやめたので、運転免許を持たない私たち夫婦も含めて、下の姉の車に便乗させてもらうことが多くなつた。八人兄弟でも今となつてはだいぶ欠けました。親しく行き来するのは、二人の姉たちとだけとなった。

「義姉さんたち大変でしょ。文雄さんがほんと、勝手を言うものだから」

妻は義姉たちの手前、気づかっただけか詫びの声を掛けた。

「それより、文雄こそ重くないか」

上の姉は骨壺の紺地の風呂敷包みに手を掛け、私たちが先ほどから見つめる方角に視線を移した。また、時折小雪が舞う時もある春先だというのに、今日は穏やかな彼岸の中日となった。遠く樺の枝を払うチェーンソーの音がここまで響いてくる。

「あーあ、これで里もなくなるね。誰がこんな末路を想像できたかな」

下の姉の言葉に、私たち兄弟はあらためて育った所がなくなる現実を目の当たりにしている。どこでどう食い違ったのか、何の因果なのかを思いめぐらせながら。

樺の根元で枯れ枝を燃やす煙が、エグネの島影からゆつくりと立ちのぼって消えていく。

エグネのない地所に密集して建つ家々が小船とすると、まわりに従え大海に出る大型船のようでもある。

喪服姿の私たちが立ち並ぶ背後から、突然クラクションが鳴り、声が掛かった。

「おばあさんの納骨ですか。今日は暖かくてなりよりだね」

軽トラックから緑色の目指し帽を被った日焼けした顔がほころぶ。本家の繁だった。本家と言っても、家の初代が隠居して連れて出た娘に分家させた時の本家である。もう五代も先のことである。それ以来、ずっと本家、分家と呼び合い親戚付き合いを続けてきた。こうした

関係は、町場育ちの妻にとつてどうしても理解しにくいことらしい。長年一つ部落に留まり暮らし続けていることで、縁が切れないのである。

隣に繁の奥方が乗っているところを見ると、どうやら墓参りの帰りのようだ。

「あの樫の木、切るのもつたいないな」

繁は移せるものならあの樫を欲しそうに、部落でも一番大きい木だと、結局一番古い木だとも言う。続けて、

「おばあさん亡くなる間際まで、落葉を掃いて屋敷をきれいにしていたなあ」

確かに母は、このエグネから舞い落ちる葉に手を焼いていた。そのまましてもおけず、追われるように落葉集めや草取りをしていた。

「おばあさんも、もう落葉も気にすることなく、のんびりしているだろうな」

繁はあの世を垣間見てきたようなことを言う。助手席の奥方も相槌を打ったが、私は母が何処へ行つても、落ち着いていられる質(たち)でないことが分っている。きつとせわしなくしているはずだと思う。

「俺たちも寂しくなるなあ」

と来た折りは遠慮無く顔を出すように告げる。ここで暮らしていない私と繁の間柄は、そうやって気軽に顔を出すほど親密でもない。だが繁は、母が一人家を守っていた頃、ずっと家の農作業を請け負ってくれていた。ある時は、畑で意識を失った母を、救急車を呼び病院

まで付添ってくれもし、大変世話になっていた。今回、家を整理する段になり、少しばかり残った田畑も早く引き取ってくれた。今もって本家だと思つてのことだろう。

「ほんと、長いこと世話になりました」

胸の風呂敷包みと一緒に礼を言うと、繁は頭をべこりと下げ、やがて軽トラックは黄色のプレートを背にして白い煙を吐き坂を下つて行つた。

「いつまで眺めていても切りがないよ」

下の姉が三人を急かす。下の姉だつて嫁ぎ先で彼岸だからいろいろやる必要がある。忙しいらしい。すべて自分がしなければいけないとも、采配が自分の手で出来るようになったが、やはり何年経つても嫁は嫁の分際だとも言ふ。母のように父も亡くなり、一人になればまた別の話のようだが。

そうだ、こんなところで長居をしてはいけなないと、自分を促すようにまた山脈に向かい、しだいに増す重さに堪え先頭を切つて歩き出した。

跨線橋の下を紫色のラインが入つた電車が通過する。想像も出来なかつたほどの辺りの変貌ぶりは激しい。国鉄時代の最後の頃に大規模な貨車ヤードがここに造られたため、この大きな跨線橋が出現した。しかし、ほんの僅かの期間操業しただけだ。合理化や民営化のもとで廃止され更地となり随分長い間放り出されていた。やつと業務用地として再整備された

が、区画用地はしばらく埋まりそうもない。

通過していく電車を見やると、有刺鉄線のあるネットフェンスに取り付けられた「注意一万ポルト」という黄色い標識が目を突く。「注意」という文字に、まだこの線路に汽車が走っていた頃の記憶が湧き上がった。

あれは夏の晩で、母と二人してこの踏切に立っていた。北から煌々(こうこう)とライトを点けた汽車が迫ってくる。母の殺気に幼い私は怖々と母のモンペにしがみつく。

「ヒヨーン、ヒヨーン」

と私たちに荒々しい警告の汽笛を幾度も鳴らし、蒸気をまわりに吐き出しながら二人の前を黒い塊がすすめて通過した。機関車の後に連なる客車の明かりを見ながら、私は安堵の気持でモンペを掴む手をゆるめた。

この出来事はおそらく私の妄想であったかも知れないが、家ではこの後様々なトラブルが立て続けに起こることになる。母のいつもながらの言葉だったが、世の習いである寸善尺魔の如く、

「長く生きていれば、悪いことも一杯だ」

と父母たちは子宝に恵まれはしたが、良かった事より母を苦しめた事の方がはるかに多かったようだ。しあわせとは、決して幸福の恵みばかりでなく、合わせ鏡のように不幸を合わせ持つ仕合わせであるという語源を何かで知って納得するものがあった。

母セツは、昨年六月末に九十三の誕生日を何事もなく越えたと思つたその後、まもなく精魂尽きたように静かに息を引き取つた。上の姉から連絡を受けた時、「とうとうこの日が来たか」と病院に急いだが、駆けつける一足前に母は、私を待つことなく逝つてしまつていた。母の思い通り、長く寝込むこともない母らしい最期であつた。

母はまだ元氣だつた頃、少し体の調子が思わしくなくなると、氣弱になりよくこう言つた。

「生まれ月が近い。お迎えがくるかも」

それは母の経験則であるが、このことを一番強くさせたのが二番目の姉、次女幸子の死であつた。肺結核で二十歳にあと一週間という時に死なせてしまつた、何とも辛い想いがあつたからだ。また、六十で亡くなつた父の時もそうであつた。脳梗塞となつて二年ほど徘徊するようになり、三月の生まれ月まで持ち越せないのではと母は意識していた。父は三月を待たず一月の初めに亡くなつてしまつた。人は生まれ月の近くに死ぬことを母は信じて疑わなかつた。嫁いだから生家で多くの家族の死を看取り、自分の親兄弟もすべてあの世に送り出し最後に旅立つことになつた。これが母の天から授かつた定命だつたのだ。

跨線橋を渡りきると道は下り坂となつた。先ほどまで見えていた山脈が、目指す寺の杉林に隠れる。私もそうだが、おそらく母も長い旅路の中で先が見えた時と、まったく見えない

時があつたのだろう。歳を重ねたからといって決してよく周りが見えるとも限らない。この山脈が突如隠れるように、その姿を見失う地点も多くあるような気がしてならない。それは、物の見方や考え方、つまるところ生き方が視野を狭くさせる場合も多い。幸せの価値観がそれぞれ人によつて違い、時代によつて変わるように、その幸せの尺度によつて見えたり、隠れたり、絶望を覚えたりもする。私の家、母の人生もそうしたことの挙句に末路を迎えたのかも知れない。

関沢川と交差しながら、寺のすぐ付け根をバイパスが通り、大型車がひっきりなしに通過する。ここにバイパスが出来るまで、国道は家の真ん前を通つていた。ちようどその国道がアスファルト舗装になつたばかりの晩秋、大型トラックが家に飛び込むという、あわや一家全滅となる出来事があつた。運転手の咄嗟（とつさ）のハンドルの切り返して、被害が縁側だけで済んだ。もしあの時、あのままトラックが直進していたら、茶の間の炬燵にいた家族は全員確実にトラックの下敷きになつたに違いない。母はこんな末路になるくらいなら、いつそのことこの時、みんなしてあの世に逝けばと思つたことはなかつたらうか。あわよく難を逃れたが、これを幸いとすればその逆に兄たちがしでかすゴタゴタ、不幸の兆候は、今思えば姉幸子の死から始まつたのではないかと、誰にも言わなすがずつと胸に抱きつつある。

父母は戦時中、鎌倉の材木座に住んだ。父が横須賀の海軍工廠（こうしょう）に配属された

からであった。父文治、母セツ、長女多恵、長男文一郎、次女幸子の五人が暮らす木賃アパート「都南荘」は、次男邦文を一歳にならぬうちに亡くしたものの、家族の原形を成す時期であった。

実家に疎開していた長女多恵のこともあり、終戦後やむなく田舎に戻ることになった。ここから、母の誤算が始まったのかも知れない。食うことが先決で、わずかながらの田畑と家屋敷に落ち着くはめになる。リュックに詰め込めるだけの家財道具を背負い、すし詰めの汽車に揺られて辿り着いたが、田舎では父の両親・叔父・弟、行き場のない母の末妹家族までが、一つ屋根の下で暮らしが始まった。

戦時中の配給で酒とたばこを覚えてから、決して腰を落ち着けようとしないうちは、土地の権利証を持ち出し金にするなど、家督としての意識に欠ける振る舞いが多かった。ある時は事もあろうが、飲み屋の女との逃避行劇もあった。なんとか母の機転で土地を買い戻し、それが母の息のかかった土地、最後まで母が守る財産となった。

母の末妹一家が家を建てて離れ、伯父や祖母も末っ子の私が生まれる頃には亡くなった。だが、ひと息つく間もなく次女の入院、大丈夫と思っていた矢先の死は言いようもなく母を打ちのめしたに違いない。母は次女の火葬も葬式さえ、家で留守番をするからと言ってかたくなに出席しなかった。よほど娘の見送りに立ち会うことが辛かったのだろう。

この時期を少しでも救ったのは、長女多恵も嫁ぎ、長男文一郎も勤め人となり、家計の手

助けとなったことだろうか。何か生きる兆しがまた見える地点に立つことが出来、母を元気づけたに違いない。

しかし、なぜかこの時点から母の描く思惑とは違い大きく横道にそれていく。小さい私には事情がよく飲みこめなかったが、家の不遇はまるで何かに取り憑(つ)かれたように始まり、続き、そして繰り返した。

結婚したばかりの長男文一郎の不倫、嫁の自殺。それを自ら責めたのか文一郎の自殺未遂。その尻ぬぐいと事の処理に、家の中は一気に重苦しい空気に覆われてしまう。頼りにしていた文一郎の脱線に母は落胆し、それに対して口やかましく言った。結果として文一郎が家を出てほとんど縁が切れたような状態になった。それでも何とか再婚相手と余所で生活しているようで、その後はしばらく表面上平穏な日々が続いていた。

今の私と同じ年頃の父が、一層酒飲みになることが多くなったが、母からすれば父こそしつかりして、支えて欲しいと思ったに違いない。ただ父の場合は、その当時の次女の死、長男が引き起こす度重なるトラブルを思うと、何でこうなるのか、その辛い気持ちのほどがよく分る歳に私もなった。

父が亡くなり私が大学を卒業する頃、結婚した三男康文の会社での使い込みが発覚、離婚。そして上京して職を転々としたあげく帰郷。やつと落ち着けそうに再婚もし、「母と同居する」と言い出し家も建てた。しかし、また使い込みや賭け事が発覚し、挙げ句の果ては仔細が分

らず仕舞いに自殺してしまった。康文の死が自殺だったことは、最後まで母には教えなかった。この間にも、文一郎の町工場が行き詰まって。「後は頼む」と書き置きして失踪する事件もあつた。その度、母と兄弟は振り回された。

それからもう何にもなからうと思つていた頃、文一郎が脳梗塞で倒れ車イス生活となつた。時を同じくして血圧が高くて倒れた四男昭文が、こともあろうにサラ金への借金が発覚。何とか生家の土地の一部を処分したり姉明子の援助で返済をしたが、昭文の借金癖は決してこれで終わることなく、結局家を追い出される形で離婚、九十にならうとする母が居る生家へ転がり込む羽目になつた。息子たちが持ち込むトラブルで、母が買い戻した田畑まで他へ名義替えとなり、残されたものは、ほんの少しの田畑と家屋敷だけとなつた。

ゴタゴタの原因の一端は、母を責める気は毛頭ないが、母にもあつたのではないか。家族の原形であつた鎌倉での生活体験を活かし切れなかつたのではないか。おそらく父母たちは、出来ればそのまま鎌倉で食べていけるものなら、そこで生活をと思つたに違いない。そうした体験を持ちながら、長男文一郎にはそうした配慮が出来なかつた。どこかで母の一方的な価値観で同居することを押し切つたことへの反動として、失敗や借財を生む弱さをつくる結果となつたのではないか。口うるさく言う反面、寛容さに欠けたのかも知れない。しかし事の本質は、こうしたことを見て、非難もしながらも問題を起す兄たちがふがいないという一言に尽きる話である。

こうした母の生き様を見ると、母が当初描いた思惑は、決して思うようにならなかった。姉たちは運良く嫁ぎ先に恵まれたが、反面、兄たちはいろんな不始末をしでかし、疫病神となり、母を苦しめ、悲しませてしまった。

世のどこの親も、子供への養育に対して見返りを決め込むことはない。ただ確かに自活してもらいたいと願うのが親心に違いない。父母の時代、多くの子供を産み、育てることは当たり前のことだった。安直に言えば確実に老いてからの生活の保障にという気持ちがあったはずだ。それは反面、結果として大きなリスクを背負うことにもなった。思うように独り立ちできない、ふがいない子供に対する親の負担は絶えることがない。思い通りにいかないことが世の常としても、母の場合はあまりに極端すぎた。母の代わりに人生の棚卸しをしてみても、果たしてどれだけのものが残るのだろうか。そう思うと、つくづく母は幸せだったのだろうか、満足だったのだろうか、と母ではなく私自身に問う。

通りゃんせのメロディに後押しされるように、バイパスの横断歩道をおたっしやカーを杖代わりに老婆が渡ってくる。一瞬「まさか」と思った。全身の血の気が引きそうになった。やはり母ではなかった。あろうはずがない。上の姉が知っているらしく声を掛けた。「いつまでもマメだな」

老婆は崩れ落ちるほど皺くちやに笑みを浮かべて、

「おばあさんには一杯世話になったじゃ。俺ももうすぐそちに渡るからと伝えておいてくれ。ナマンダブ、ナマンダブ」

と、口をムニヤムニヤさせながら渡りきった。母の化身のような気がして、その後姿を追いたい気持ちで見ている。

「早く渡つてしまつてよ」

信号機が点滅しかけている。横断歩道の真ん中で立ち止まり、時間のかかる姉たちを先に渡らせ、イラつく車の運転手に軽く会釈を投げた。

「何ぼんやりしているのよ」

妻が注意したが、分かつた分かつたと言ひ、母に会つたとは言えないで、私はまた先に立つた。今一度、横断歩道の向う側を振り返ると、老婆の影はどこにもなかつた。

お寺の脇の蓮池のまわりには、また少しだけ黒くなりかけた雪の塊が残っている。いつもお盆の頃には二、三輪花を咲かせる。こうしてお寺に来ることは決して嫌でなく、むしろなげか心持ちが落ち着くものがあつた。幼い頃から盆や彼岸の墓参り以外に、何度も寺に顔を出す機会が多かつたせいもある。姉幸子、翌年の祖父、父文治、兄康文の葬儀。加えて父が亡くなつてからは、母の代わりに親類や隣近所の冠婚葬祭にずっと出ていたせいもある。この冠婚葬祭への代理出席には、いつも妻が異論を唱えた。

カラスが頭上でうるさく鳴く。彼岸で余計供え物があるので、カラスも和尚もかき入れ時のようだ。カラス鳴きは昔のように災いの前兆でもなく、ゴミをあさるエサ欲しさに喚くただのカラスになりさがってしまった。だが、それも人間界の都合でしたことで、カラスの勝手でしたことでもなさそうだ。

沢水が勢いよく流れ下る寺の山門の前、ここに架かる橋を渡る。この沢は改修されるまでの倍ほどの川幅があり、盆には灯籠流しがされた時期もある。心許なく揺れる一間半ほどの長さの木の橋が架かっていた。おそろおそろの列になり渡ったものだが、下を流れる沢は地獄界のようだった。橋のたもとは、墓参りの帰り子供の頃よく石積みをした六地藏が昔からある。赤い前垂れがいつ見ても異様さを漂わせ、現世と来世の結界を感じさせるものがある。地藏たちが「心して渡れ、その橋を」とささやく気がする。しかし、車でやってくる近頃では、この山門をくぐらず裏手の方から直接墓地に入ることが多い。

父が死ぬ時期が近くなったと感じた頃、暗い川を流れていく父の光景を幾度も夢に見た。何処に流れて行くのだろうと思ひもした。その頃旅行した恐山のあの荒涼とした賽の河原の風景などがだぶったのかも知れない。父の死は、悲しみより日々昼夜徘徊で振り回されることからの解放の方が母とともに強かった。

父が亡くなって初七日、集まった兄弟でその後の母のこと、家のことをどうするか話し合いをした。すでに私以外は結婚していたが、兄たちはすべてそれぞれの都合があるらしかつ

た。決して母の思い通りにならなかった。その時、つくづく兄弟は他人の始まりであることが身にしみた。ならばこの土地だけは守り続けなければと、その時は思いもしたし、また家というものに淡い期待も抱いていた。話し合いは決裂した形で終わり、その後こうした問題を面と向って話すことは兄弟の中でずつと避けることにもなった。兄弟や親戚が帰った晩、母は台所で一人食器の後片づけをしていたが、その食器のぶつかり合う音が母と私だけとなった広い家の中で響き合い、寢床まで届いて来た。

白幕が張られた山門をくぐると、建替えられてもう十年近く経つのに、まだどこかよそよそしい本堂が見える。やはり入口には紫の幕が張られている。一人所帯ながら檀家である母は、周りの家々と同じように建替えのための寄進を続けてきた。その寄進で本堂ばかりでなく、庫裡や住職の住いまでが立派になつている。こうした寺経営は墓地の新たな造成に始まり、会館の建設、そして本堂の建替えと、父が亡くなつてから矢継ぎ早に続けられてきた。

もともと家の墓所は本堂の裏手、杉林に囲まれた小高い山の上にあつた。昔からの墓所で部落の親戚関係がほぼ一つ所にまとまつていた。父が亡くなり数年して、墓石を一つにまとめ新しい墓石を建てると母が言い出した。昔からの墓石のほかは、その後埋葬した家人の墓石は目印として石が置いてあつただけだ。墓所の境も定かでなく、墓掃除の度にその堺石は動いた。いわばこの土地の人たちが折り重なるように、埋葬されこの小山の土に還つていた。

新しい墓石は、石屋と一緒にロープで曳いたり、押ししたりして上まで何とか引き上げて建てた墓石だった。石屋はこうして建てるからこそ有難いのだと言ったが、それから何年かしてこの小山を削り会館を建て、墓所を新たに区画した平場に移すことになった。曳き上げて建てたばかりの墓石を今度は降ろす羽目になったが、その差配すべてを母が一人で行ってきた。新しい墓所は芝生だけの整然とした所になった。すぐ前を山門前に注ぎ込む沢水がゴウゴウと流れている。ここは結果として母の安住の地として、自らが普請し続けたことになった。墓の区画が同じ広さとなっても周りは娑婆(しゃば)のように、ここでも軒の高さを競い墓石が林立するようになっていく。

本堂の中は香の匂いと煙で満ちている。母の納骨の読経を無理を言つて十一時にしてもらったが、まだ少し時間がある。本堂のタタミにひとまず骨壺を下ろし、風呂敷包みを解いた。おそらく母も考えていなかったように今まで事を進めてきたが、あの世でこんなはずがないと思つているに違いない。

母の知らない、もしもの事は私は二人の姉たちと、もちろん母には内緒で決めていた。それは上の姉から口を切り、

「内輪だけで葬儀をしよう」

と話が出た。下の姉も私ももちろん異論はなかった。兄弟だけ中心に、家ではなく今流行

の町場の葬祭場を借り弔いを済ませようということになった。おそらく従来通り家に祭壇をつくれば、隣近所はもとより部落の人たちが弔問に来ることになる。この土地の習わしで、初七日が済むまで念仏やら墓参りと忌み明けを済ませるまでが大変である。それらの準備に振り回されるは女兄弟や嫁たちになる。もうそんなことは、この際一切しないことにしようというのである。大賛成だった。私もその場になつたららのことを、いつも頭の隅にあつた。周りの状況を考えると、自分の本意ではない方向にしむけられることもあるのだろうと思つていたので、胸のつかえが少し取れたような気がした。

上の姉は続けて、

「どうせ跡取りもないし、これから部落との付き合いもなくなるのだから」

とも言う。これは以前から上の姉夫婦に言つていたことであつた。私は一人娘を嫁がせてやつた。兄たちがいくら不甲斐ないからといって、私がか跡継ぎの真似事をしても結局、また娘にその重荷をたらい回しにするだけだ。だから、もし跡を取りたい人がいれば、その人でもいいのではと思ひもした。例え家や土地が借金の形になろうと、売り飛ばされようが、全てそれは跡取りの甲斐性で決めるべきだと思つた。

「もうゴタゴタが一杯あつた墓守りもしたくないし、その墓にも入りたくない」

と宣言した。寺の世話役もしている義兄が、

「それじゃ、ゆくゆくは実家の墓を無縁仏にしてしまつてもいいのだな」

と情けないと言いたげだったが、私はいずれいつかそんな時はくるのだからと思った。生前、母が事細かく指図していた土地や家のことについて、母が聞けば嘆く話かも知れないが、そうすることが一番であると思った。

母は死ぬ間際まで、カタカナ混じりで日々の出来事をメモふうに書き留めていた。生前私が顔を出した時、その数あるノートの中の一冊をめくってみたことがある。そのノートの文面に、トゲが刺さる思いがした。

今日は朝、アツキよりした。

又、それから よりました。

アズキはきまりました。

こんどはクロマメです。

フミオが来て、すぐいった。

コシがほんとはないので、

おもわしくない一日でした。

一人暮らし、何をして過ごしているのか、どんなことを書き留めているのかと思つたが、

母が書いているとおりだった。足が遠のきがちで、何かの用事に併せてその時間の合間を見計らい、母の顔を見に安否を確認するだけの目的で行く私だった。一時間ほど、いつもの母の話を聞き、特別何も不自由がないか様子を見て帰る。元気でいることが確認さえできれば、息子の私から家族や仕事がどうのこうのという話は、あえて九十歳になろうとする母の耳に入れるまでのないことだった。見た目に顔色もつややかで表情に精彩がある時と、何やらお迎えがやはり近いなど感じる時があった。それを母もよく分かっていた、

「もう、そろそろかも知れない」

「長生きしすぎたじゃ」

と弱音を吐くことも多くなつた。その頃から共に若い時分から野良に汗した部落人を先に見送ることが多くなり、部落で一番の高齢となつてしまつていた。

少しだけ耳が遠くなつた母の話は、ともすれば一方的に、自分が寝込んでしまつたり、死んだ時の事をあれこれ私に指図した。いつもの事ながら私は、生返事だけで半分聞き流し、一方でその時が確かに近づいていることを再確認していた。壁の時計に目をやり、

「これから用事があるから」

と帰ろうとする私に、母は隣りの家との敷地境を、しっかりと覚えておくようにとも念を押もした。いつも何かと世話になつている隣人に対しても、この件だけは別問題だった。頑固として譲ろうとしなかった。私にしてみれば、こんな隣近所のことでもこれからもめたくない。

都会でもあるまいし、土地の多少の境など今さらどうでもいいのではないかと思つた。ましてや、足かせとなる家屋敷や田畑を誰が守っていくとていうあてもないのに。最後に残された母の執着心に、本音はあまりいい思ひはしなかつた。しかし、それをいまさら母に諭(さ)しても酷であり、立ち聞きしながら、

「分かつた、分かつたから」

と母をただ安心させるしかなかつた。

母はこの家に嫁いで来て、いろんなゴタゴタをくぐり抜け、最後まで自分が家と土地を守つてきたという気持ちが一倍強い。そして自分の最期の後始末で迷惑をかけたくないという思いから、

「葬式代だけは、なんとかなるべ」

と、なげなしの預金の額の話をした。とにかく後に残る者へ話し、伝えておこうとする気持ちに分からなくてもなかつた。やがて死んでいくことを重々覚悟してのこと、母の旅支度であろうことも承知した。

さらにくどくなりそうな母の話を、かわいそうだが途中でさえぎり居間を出たが、玄関先でいいのに門口までわざわざ一緒に出てきて見送つてくれた。結婚して、母と離れて暮らすようになつて帰り際、その度にひよつとして、これが最後かも知れないと思ひながらいつも家路についた。とりわけここ数年は、もう再び会うことがないのかも知れないと、覚悟だけ

はしていつものように別れた。

近くの停留所から乗ったバスが生家の前を通り過ぎる時、車窓から再び目を向ける玄関先に、だいぶ小さくなり、腰も曲がりつつある母の後ろ姿をもう一度確かめたものだ。何事もなく会えた安堵の気持ちと、少しは母の相手をしてやれた自己満足で、車窓の移りゆく田園風景をぼんやり見やり、その風景に、別れたばかりの老いた母の姿をだぶらせ、胸にそつとおさめもした。

母の想いは、当然ながら意に反することも多つたが、子に世話にもならず一人で気丈夫に暮らしを守り続けてきた母を、その時が間近であろうお迎えを思うと、それが老婆心の何ものでもないが、子に対する親の気持ちを、ただ、ただ受け止めることしかできなかった。

庫裡(くり)からの戸が開いて若住職が本堂に入ってきた。母の遺骨を阿弥陀様の前に設え、鉦の音とともに読経が始まり、私たちは若住職の後に一列になって座つた。もう住職も体がかかることがきかないらしく、ほとんどを若住職が取り仕切るようになった。ただ、葬儀だけは何とかして行っているようだ。母の葬儀も無理をしながら取り仕切ってくれた。

沢水のほとりに紫陽花が咲き乱れる梅雨の晴れ間、あの時もごちんまりとした葬式だった。別に為知(しらせ)を出した訳でもなく、漏れ伝わった隣人が顔を出す程度だった。だから住職はきつと変に思ったに違いない。いつもなら葬儀の中で行う和讃も、身内だけで送り出す

のだからと失礼した。本当のこと、和讃はあげてやりたかった。しかし、断つたもう一つの訳は、何とも切ない和讃の節を、あの場で聞くことに耐え切れなかったかも知れないからだ。

母の遺骨は、多恵の家でしばらく預かることにした。後で母が亡くなったこと知り、線香をあげに来る人がいるのではないかということ、四十九日まではということにした。しかし、なかなかその後の兄弟の話がぎくしゃくして、結果として一冬越しての納骨となつてしまった。

若住職の読経に隠れて、こっそり和讃の文句を唱えてみた。本堂の涅槃図のような天井格子を仰ぎながら、

衆生本来仏なり

水と氷の如くにて

水を離れて氷なく

衆生の外に仏なし

衆生近きを知らずして

遠く求むるはかなきよ

譬えば水の中に居て

渴を叫ぶが如くなり

和讃を唱えてみると、先ほどの蓮池が浮かんできた。今は泥水の中に枯れ枝のように数本ある蓮池だ。その泥の中からやがてあの美しい花を咲かすが、水底から見上げる蓮の花が咲く現世は、此処こそ四季彩豊かな極彩色の世界ではないかと思えた。「水の中に居て渴を叫ぶが如く」、実は私が生きているこの時間、世界こそが限りない浄土ではないかと思いを巡らす。今は雪が解けたばかりで、道端には萌葱色（もえぎいろ）のふきのとうしか顔を出してしないが、たちまち緑色を増し、花々が咲き、季節が巡る。そんな現世にいとおしさを感じ、鼓動を繰り返す自分に優しくなった。母を旅立たせてしまったこと、何もしてあげられなかったことが、その時改めて悔やまれた。

沢水の流れの側の墓地、妻が線香を点けようとマッチを擦っている。穏やかとはいえ、谷間の風が炎を揺らすのでなかなか火が点かない。春彼岸の卒塔婆（そとうば）を立て掛け、墓穴に遺骨を入れる線香立て石を動かす。汚れた墓石にひしゃくで水を掛け、洗い流す真似をする。姉たちは、持参したわずかばかりの菓子と白いだんごを重箱のまま供える準備をしている。

「さあ、入れようか」

骨壺に被せていた布を取りはずし、蓋を開けた。火葬場で骨壺に収めた時以来の対面となる。

妻が切り花を墓石の脇に供えながら、

「先にいただきますようか」

と、ハンドバックからマツチ箱ほどの小箱を差し出した。

「そうだな。姉さんたちいいね」

骨壺の中、上にあつた形によさそうな骨のひとつを、そつとテツシユに包み小箱に仕舞い込んだ。私と妻は、ずつと前から二人の母の骨のひとつを預かり、拝もうと決めていた。

「いいなおばあさんは文雄と一緒に。文雄に大事にしてもらえよ」

上の姉は母の骨を粗末に扱うなど、暗に戒めているようだ。骨壺を持ち上げ、墓穴に一握りずつ放り込んだ。脇で妻も姉たちも手を差し伸べ放り込んだ。この墓を造つてから、移してきた骨の上に、三男康文、叔父栄吾、そして母の骨が穴底に重なり収まる。壺の底に残された粉も残さず底を叩き、

「また来るからな」

と暗い穴底に声を掛け、線香立て石で穴を塞いだ。実際のところ、本当にここに閉じこめてしまふのなら、あまりにも母には最後までむごい仕打ちをすることになる。帰り際、空になった骨壺を焼却炉の側のゴミ捨て場で叩きつけて割った。何かが砕け散るような思いがした。それは母を縛り付けていたものだろうか、それとも私と生家を覆っていた「家」という幻想だっただろうか。

こんなものを守ってきたのであろうか。それは確かにこの土地との決別であった。

母の遺骨のひとつかけらを仕舞った小箱が、私の歩調に合わせて、カタコト、カタコトと音をたてる。子供の頃母の腰に隠れながらまとわりついて回ったように、今母が私のポケットではしゃいでいるかのようである。

また、跨線橋にさしかかった。納骨を終えてしまい胸に抱くものがなくなつたせいも、両手が自由になつたためか、心持ちが大分軽くなつたようが気がする。トラスの合間から生家の島影が見え隠れしている。跨線橋を渡りきつてその島影が妙に小さくなつたような気がした。

「ずいぶん、べしゃんこになつちやつたね」

妻がその有り様を正直に言い当てた。本当である。先ほどに比べると押しつぶされたようにべしゃんこになつた。逆にエグネに隠れて今まで見えなかつた本家のエグネが島越しに見える。本家のエグネは三十年ほど前に新築した際、一度切り倒しその後植え直したエグネである。それがこうして見えるようになったのだ。

「また、もとに還つたということか」

私は独り言のように言った。それは以前、この土地の江戸時代末頃の古地図を穴があくほど眺めたことがあつたからだ。江戸の頃は北上川沿いに奥州街道が通っていて、人家のあつ

た集落の塊も今と随分違つていた。もちろんその頃には生家のあたりに家影は描かれていない。集落の戸数は、今でこそ百戸ほどに膨れあがつたが、もともとは二十軒にも満たない戸数であつた。しかし、この百五十年、いや私が物心つてからのことを振り返つてみても、家や屋敷がなくなつたところが数軒ある。昔、五百刈田屋敷とか雲南田屋敷と呼ばれ、下働きを置いた立派な家構えをして、旧家とされていたところさえもである。生家も私自身が決めたことだが、こうして姿を消そうとしている。そして、やがて忘れ葬り去られようとしている。あれほど私の生家のことに文句を言つていた妻も、

「本当になくなつてしまふのね」

と、事の重大さにやつと気付いたようで寂しさをみせた。寺に行く時に眺めたように四人で並び、様変わりしつつある生家の方を見つめた。上の姉が涙声混じりに、

「これで本当に良かったのかね」

「幸子も盆に帰つて来て、戸惑うだろうな。何せ目印のエグネも建物さえないのだから」

と溜息をつきながら言う。私は今さらと言うような顔をして、

「仕方ないだろう。これが我が家の定めだ」

上の姉の言葉を遮つた。姉幸子が逝つた朝、姉が知らせを聞いて、嫁ぎ先から駆けつけてきて幸子の枕元で泣き伏した姉の姿が蘇つた。

兄弟は多かれ少なかれ、早逝した姉のことがずっと頭の隅で引きずつてゐるのだ。

今から半月ほど前、雪がちらほら舞う中、生家の建物の解体に立ち会った。ひと昔ならば親戚や部落総出で、煤で真つ黒になりながら解体したものであった。その解体後には新築が控えている目出度い行事でもあった。しかし、今回は更地にして処分するだけであつて、きつとまわりでは家名没落の最後の姿として受け取り、陰でこっそり見ているに違いないと思つた。

定刻を少し遅れて、重機による取り壊しが始まると、破られた青い屋根の中から、すぐ昔から見慣れていた煤けた台所の梁が表われてきた。古い部分と屋根替えをした時に使つた材料とが入り混じり、重機のツメで引き裂かれ、潰されダンプに積み込まれる。黒々とした大黒柱にしがみつく母を引き剥がすように、私の思い出も剥いでいく。土埃をおさえるためホースで水が掛けられるが、百五十年堆積してきた埃は重しが除けられ、なおも浮き上がるうとした。

黄色の重機のアームが上下する中、浮き上がる埃の中に白いビニール紐のようなものがゆらゆら舞い上つた。重機を止めて作業員がやつと掴むと、

「何だこれは。白蛇の抜け殻だ」

と周りに叫んだ。作業を止めてみんなで囲んで見入った。そういえば何時だつたか、母が夜中に長押を這う白蛇に出会したと言つたことを思い出した。決して気持ちのいいものでは

ないが、大切な家の護り神だから、

「見つからないうちにどこかへ行け」

と言つて、そのままにしたそうだ。

母が言う通り護り神だとしたら、白蛇は一体ここで何をずっと護つてきたのであろうか。それは一人となつた母であつたろうか。その白蛇は誰の化身だつたろうか。早死にした次女だつたろうか、父だつたろうか。それとも、戦死した父の弟であつただろうか。

古い建物は丸一日かかつて取り壊しが終わった。その跡にはコンクリートブロックを積んだ基礎、母に小言を言われながら父が手作業したコンクリートのタタキだけが残された。幾分陥没した建物の跡は、埋めきれなかつた私たち家族の想いのようにも見えた。夕刻から雪はその陥没した跡に降り積もつた。

古い家を取り壊したことで、前庭が広く使えるようになり、晴れ上がつた翌日は私が設計した白い家を壊すことになつた。父母が望むように大工や左官にはならなかつたが、地元で建築を学ぶ道に進んだ結果のことだ。生家の建替えは、その後亡くなる三男康文夫婦の家を古い家の脇に建てることで実現した。しかし、その兄もゴタゴタ続きで、この白い家で弔いされてから、結局母一人の終いの住処となつた。

生家の白い家を設計してから私は、あまり住宅設計に熱心ではなくなつた。それは住宅の設計だけでは、なかなか食べていくことが難しいことにもあつたが、子供の頃、学生の時か

ら抱いていた住宅への想い、社会的意義というものが私自身の中で急激に薄らいでいった。決して家は家族の幸せの器とはなりえない。時にはかえって自由を縛るものとなり、それを守らんがために多くの犠牲を払うことさえある。片田舎の土地はそこに住んで、耕してこそ値打ちもあり、住まわなければ厄介物となる。それを私自身が設計に携って実感し、もういいと思い、それから手を引いたのである。

その転換点でもあつた白い家を取り壊される。古い家とは違い、壊される姿を目の当たりにしても、なぜか気持ちがサバサバしている自分自身に驚いた。まるで、どこかの現場で新しく家を建てるための解体作業に立ち会っているような感覚だつた。古い家と違う薄っぺらな材料、か細い部材、埃もあまり立つことはない。白い家は半日もかからずトラック七、八台程度の積み出しで姿を消した。あたかもプレファブで急ごしらえした仮設住宅を取り払うようでもあつた。

私はこれもいいなと思えた。何もいつまでも一つ土地にしがみつく住い方ばかりがいい家であるはずもない。長く使い続けられる家だけが本物であるはずでもない。遊牧民がテントを移動の度に持ち歩くように、また必要なところに家を持てればいいのだと思う。家族を乗せる舟にあまりいろんな物を載せすぎたこと、一人で背負い切れぬ物を持ちすぎた今の世の中、家に対して過大な思いを寄せるから、結局中途半端な使い捨てになるのであろう。あるものを越えようとする時には、意識して捨て去る、裸になることも必要だと思つた。所詮、

あの世には何物も持つていけないのだから。白い家は二十五年の役割を終えて私の記憶の家となった。

「文雄たちはどこに入るのかい」

上の姉が唐突に聞いてきた。私のこれからのことを案じてのことだと思った。二人の姉たちも母にこの頃ずいぶん似てきたと思う。私自身もここ十年ほど父に随分似てきたなと思う時がある。きっと他人がみればそっくりだと思うに違いない。

「まだ、どこも決めていないよ。これから先のことなんか分るはずないしな。親父の歳までだと、もう五年もないけどな」

勝手な返事に下の姉も口を出す。

「そんなことで、心配じゃないの。栄吾さんのようになって、面倒なんかみてやらないからね」

栄吾とは父の弟である。若い頃から極道に足を入れ、最期は年老いて東京の施設で一人寂しく死んでいった。身寄りもなく結局は本籍地に照合され、遺骨を引き取りに行つてきもした。叔父は最期まで結局母に厄介になり、里の墓に入ったのである。私は叔父の生き方が決して悪いとは思っていない。極道は極道らしく、そのツケを自分で背負い死んでいったと思つている。しかし、姉たちにしてみれば、土地を離れて最期に頼るのは血のつながった兄弟

しかないだろうと言うのだ。

「みんなそれで、今まで苦しんできたんじゃないか」

私は吐き捨てるように言った。そのように帰るところがあるからつい甘えてしまう。うまくいかなかった兄たちはみんなそうだった。だから、生家、家や土地なんか良い方が良く、私自身が割り切ったのだ。

ひよつとして私の家系は、真つ当な世間から一步はずれた一家なのかも知れないと。男兄弟含めて、若い頃は祖父、父、叔父の酒飲みやふがいなき、そして一見遊び人風の氣質を非難もし、嫌い、決してそうならないと思つた。でも結果はこの有り様だ。生家に再三トラブルを持ち込む。そうしたちゃんぽらんな行動は、一体誰に似たのか。父方の性格を受け継いだものかと思う。「血が騒ぐ」とはこういうものなのかと。

そういう私も小さい頃、極道の叔父にかわいがられもし、旅芸人や放浪へのあこがれは人一倍強い。この土地からの決別もそうした擦り込まれた遺伝子がさせたとも言える。私の肌が知覚するものがあり隠れた心性なのだ、と言うと妻が、

「それじゃ、はじめから所帯など持たなければ良かったのに」

と切り返してくるが、だがその一方で、それを必死にくい止めようとする母の遺伝子がある。どちらかと言えば物事におぼれない堅気の體質である。父方の「遊」の遺伝子と、母方の「堅」の遺伝子が私の中で交錯、もつれ合う。そのせめぎあいにもう一つ、私自身が五十

年間以上培つた遺伝子も一方で頑固になり、三つどもえとなる。

そういえば私の性格は、兄弟に言わせれば小さい頃からクールな性格らしかった。兄たちのトラブルを横目に、「あつしには関わりのないことでござんす」と、木枯らし紋次郎に似た渡世人なのかも知れない。それが、父と母から受け継いだ遺伝子の落ち着き処なのだとも思う。

「いつそのこと、歳を取つたら鎌倉にでも住むよ。ここより暖かいしな」

鎌倉は姉たちの生まれ育つた土地である。私たちの家族の原形のような場所でもある。そこに歳老いたら住もうと最近真剣に思っている。父が亡くなって間もなく、離婚した康文が叔母を頼つて鎌倉に住んだ時があった。私も東京で仕事が出来そうな機会もあった。そんな時、母がこんなことをふと言つた。

「鎌倉で暮らすのもいいかもな」

母の意外な提案に驚いたが、あの時はまだ、母の妹が戦時中からずっと同じ「都南荘」で暮らし続けていたころでもあった。そんなこともあり、独り身となつた母は鎌倉で暮らすのも悪くないと思つたのかも知れない。

そんなことを思い出しながら、埋め尽くせなかつた家族の想いを改めて埋め戻してやりたい気持ちでもいた。

「ばあちゃんのことをきつと鎌倉に連れていくよ。あんなに、もう一度みんなで鎌倉見物に行こうよと言っていたじゃないか」

まだ母が足腰の丈夫な頃、上の姉が段取りをして母を連れて、兄弟で鎌倉に行こうと正月に集まった時に話が盛上がった。しかし、その後の四男昭文の借金等のトラブルで結局果たせないでご破算になってしまった。

私自身二十歳の頃、このままこの土地にいる運命ではないと強く意識した時期があった。それは父母と暮らさざるを得ない状況、家に最後に残された息子の存在として無意識な反発だったのかも知れない。川の流れが下流に向かつて流れるように、自分もいつか北上川を下って別の土地で生き、死んでいくことが親の枠から一步出ることではないかとさえ思った。だから一人娘には自由にさせたし、自分の世界とは別な土地に暮らして欲しいとも思った。

「ばあちゃんに、また長旅させるかもな」

私は正直そう思った。いろんなことがあったが、あえて父母そして先代たちが守り続けてきた家、屋敷、田畑を手放し、新たな死に場所を探して歩き、彷徨うのだから。ひとかけらの母の遺骨も、いつ私の骨と一緒にたつて大地に還るのかわからない先行きでもある。「もしかして俺、生まれる処を間違えたのかな」

後悔とも願望ともとれるような話をする時、

「お前も大馬鹿だな」

下の姉が呆れて言った。妻は黙って三人の話を聞いていた。妻自身は、私より先に逝くものと勝手に決め込んでいるが、ただ万が一、後に残された場合のことにいつも強い不安を抱いているようだ。

生家の島影は、やがてすっかりエグネも切り倒され、整地される予定になっている。三百坪あまりの土地は、数年後に何軒か見知らぬこざっぱりしたショートケーキのような住宅が建っているかも知れない。それはそれでいいことだと割り切っている。今まで育ってきた島は、この土地に生きるために代々借りて暮らしてきたものであると思う。この土地で生きる意味がなくなつた者は、やがて返す時が遅かれ早かれ訪れるのだ。初夏になると周りの田んぼに水が満ち、包み込まれ、生家のあつた跡もそれに同化するように緑なす大地に還っていくような気がしてならない。そして、私たちの暮らしも生きた痕跡もいつかは失われて大地に還る、抱かれる時から決して逃れることが出来ないのだとも思う。

母の小箱をポケットから出し、耳元で振つてみた。跨線橋を渡ってくる春風が耳元をすり抜け、音がかき消されそうだ。それは母の後生まで三世の因果のもと、あてのない放浪、下ろせぬ業を背負っているようで何とも頼りなく、体が締め付けられる鈴の音のようだった。

「はあちゃん、悪いな我慢してくれ」

私の行き着く先まで、さらに親不孝を重ねることをひとかけらの骨に詫びた。

北上川を新幹線が南に猛スピードで渡っていく。青い山脈のふもとに広がった大地、北から南へと流れる大河。そんなところに生まれ形づくられた島影が、父母の家族の痕跡が蜃気楼のように揺らめき消え去ろうとしている。新幹線の車窓からはいつものように過ぎ去り、飛んでいく、数秒単位の中で確認できるかどうかの島影が、今一つ消えていく。